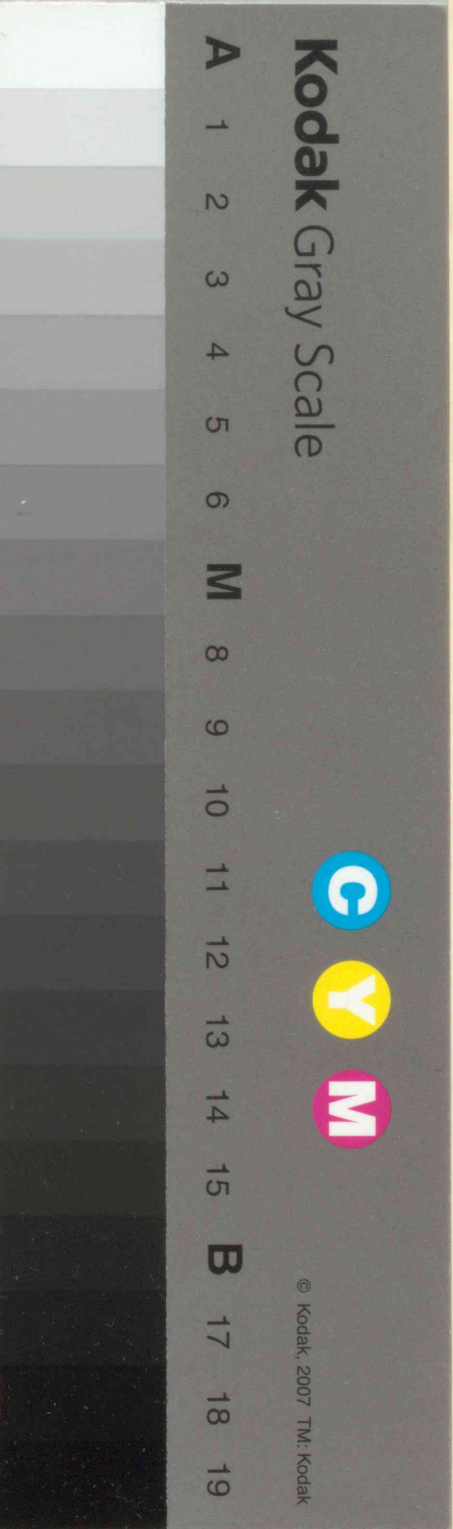
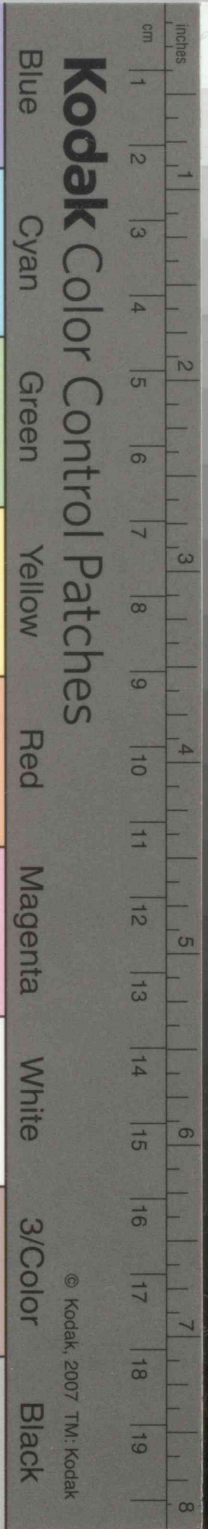
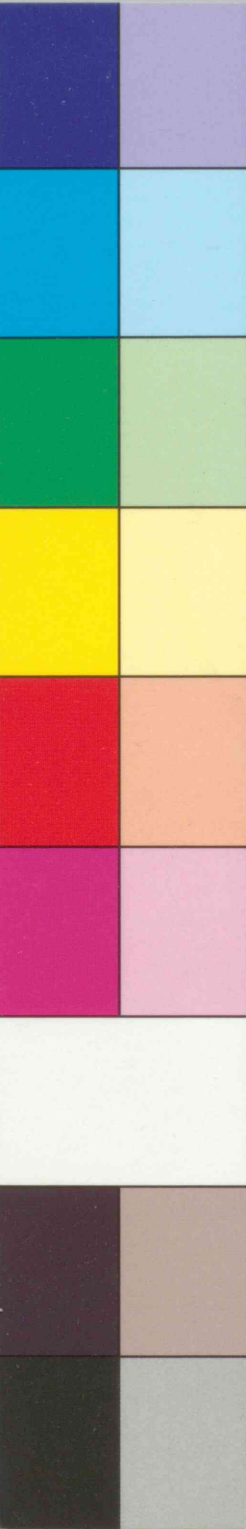
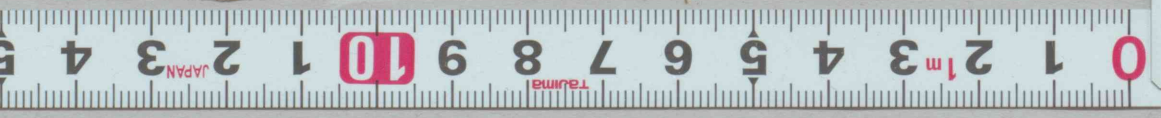


訂女子國語讀本
卷九

375.9
Y019
資料室



42160

教科書文庫

4
810
42-1919
200030
1954



© Kodak, 2007 TM: Kodak

© Kodak 2007 TM: Kodak



東京



女子國語讀本卷九

吉田彌平
小島政吉

篠田利英
岡田正美
共編

金港堂書籍株式會社

訂四 女子國語讀本卷九

目次

一	國家の獨立	法學博士 穗積 八束	一
二	祖宗の宏謨	德富 蘇峯	六
三	明治天皇御製(短歌)		一二
四	羽衣(謠曲)		一七
五	音樂		二四
六	趣味(口語文)		三〇
七	日本繪畫の流派		三八
八	平安京	文學博士 藤岡作太郎	五三

九 日野の山奥……………鴨 長明……………五九

一〇 遠山櫻(短歌)…………………………六四

一一 奥の細道……………松尾芭蕉……………六八

一二 嫁菜(俳句)…………………………七六

一三 人の新盆に(候文)……………樋口一葉……………七八

一四 百蟲譜……………横井也有……………八一

一五 千客萬來(狂句)…………………………八六

一六 落花の雪……………太平記……………八七

一七 熊野落……………太平記……………九四

◎狐塚(狂言)…………………………一〇二

一八 敦盛の最期……………平家物語……………一〇七

一九 扇の的……………平家物語……………一一一

二〇 義時と泰時……………増 鏡……………一二七

二一 新島守……………増 鏡……………一二一

二二 唐錦(短歌)…………………………一二四

二三 東路の旅……………東關紀行……………一三〇

二四 古戰場……………井上文雄……………一三八

二五 古語(漢文直譯)…………………………一四〇

二六 世界の四聖……………文學博士 高山林次郎……………一四一

四訂女子國語讀本卷九目次終



四訂女子國語讀本卷九

故東京帝國大學法
科大學教授 帝國
學士院會員 法學
博士、大正元年歿
す。

一 國家の獨立

穂積 八束

國家は土地・人民及び主權の三要素より成る。一定の土地を領域として、民衆こゝに共同の團體を爲し、唯一の主權によりて統治せらるゝ社會の形體を國家と謂ふなり。國の領土は國の存在と統一とを表す。國土は國民の安宅なり。外權の侵犯を防衛し、獨立自營、以て世界に立つ。この神州瑞穂の國は祖先の經營開拓せる處、祖先の墳墓の故域にして、子孫の永くその生を安んずべき樂土たり。この

美麗なる山水は我が數千年の歴史の記念たり。新に不毛の地に漂泊し植民移住したる者も、猶其の國を愛す。況や到る處祖先千古の經營の跡を遺し、山川草木悉皆、古人の遺愛に非ざるなきに於てをや。又況や海陸産に富み、風土溫和にして民生を厚うするに足るに於てをや。我が國土は山川草木の美を以て祖先の遺跡を畫きたる日本歴史その物にして、之を愛惜するは我が既往の存在を愛惜するなり。我が豊饒なる國土は、數千年の久しきに亙り、外域の互易を待たずして能くこの大民族を養ふに足る。之を愛惜するは獨立自衛の經濟を愛惜するなり。異種の人をしてこの祖先の遺跡を蹂躪せしめず、この民族自營の根據を占奪せ

しめざるは、祖先及び子孫に對する吾人の責務なり、國の獨立を防護する所以なり。

國の人民は國の本體なり、合同風化して以て獨立の團體を爲す。その團體が歴史上偶然の投合に出づるも、なほ相寄り、相愛す。況や同祖の遺胤たる我が同胞に於てをや。我が國は數千年の久しきに亙りて、深く異種の人に交らざりしが故に、風教の純一を保維し得て、團結の心、共愛の情、其の強固を加へたること甚だ大なり。此の特質を發揮し、以て外間の覬覦を防ぐ。奉公愛國の精神は、我が民族の天性に具ふるところにして、國體を永遠に維持し得たるもの、一に是に由れり。彼の史上或はその國土を同じうし、その國名

を更へざれども、その本體たる民族は早く既に滅亡に屬し、祖先の墳墓既に異種の人の蹂躪するところとなれる類と日と同じうして語るべからざるなり。若し我が民族にして亡びんか、日本の山水あり、日本の住民ありとも、我が日本國は既に存在せざるなり。

國の主權は國の獨立を表す。主權なければ統一なし。統一なければ國家なし。國の獨立の存在は獨立主權の存在に係る。主權とは社會最高の主力にして、外部に對して獨立なる權力を謂ふ。主權を防衛するは國の獨立を防衛するなり。我が國は萬世一系の皇位を以て主權の存する所とす。皇位は天祖の靈位にして、皇胤之を受け、天壤と與に

窮なし。神聖なる皇位を侵す者あらば、國の主權を侵す者なり、國の存在を毀損する者なり。之を防護するは國の獨立を防護するなり。共和の約束に因る主權は、須用なれども神聖ならず、人民之に服従すれども之を崇拜せず。我が主權は天祖の威靈にして、社會を保護する用を爲すと同時に、神聖侵すべからざる特質を有す。主權は社會を保護するが故に之を尊重し之に服従すべしといふは、その服従すべき原因を示すなり。我が民族が之を神聖なりとして崇拜する情は、利害の念を超絶せる特殊の風教に由るものなり。萬世一系の皇位を崇拜するは、我が獨立の主權を敬愛するなり。獨立の主權を敬愛するは、國の獨立を愛重する

ものにして、奉公愛國の情が我が神聖なる皇位に對して發
表せらるゝ所以なり。(愛國心)

國民新聞社長、貴
族院議員。

大正元年七月三十
一日。

二 祖宗の宏謨

徳富蘇峰

恭しく天皇陛下御踐祚の翌日、朝見式の勅語を奉讀するに、
『祖宗の宏謨に遵ひ』の一句あり。又、議會開院式の勅語にも、
此の句あり。吾人は祖宗の宏謨を如何に陛下が崇尚し給
ふかを、恐れながら付度し奉らざるを得ず。而して、私かに
自ら顧みて、祖宗の宏謨とは何ぞや、と胸に手を當て熟思精
想するを禁ずる能はず。蓋し、之を解釋し得るは、我が陛下
の臣民を統率し給ふ大本、大綱を解釋し得る所以なればな

り。

伏して惟るに、祖宗の宏謨には、二個の要素あり。第一は帝
國の統治なり。即ち

瑞穂國是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。

寶祚之隆當與天壤無窮者矣。

の一節にて囊括す。我が帝國の萬世一系の皇統の下に統
治せられ、宇内無比の國體として特立する所以、實に此に存
す。吾人は之を稱して皇室中心主義と云ふ。而も、只皇室
を中心として、大和民族が一孤島に蟄伏するは、決して祖先
の宏謨にあらず。蓋し、皇室中心主義は體なり、其の用に至
りては、更に他に存す。吾人は之を稱して日本中心主義と

云ふ。是世界に對して然るなり。而して、此の主義や、我が帝國の上代文學に最も高朗昭著に之を説明したり。

辭別。伊勢爾坐天照太神能大前爾白久。皇太御神能見

霽志坐四方國者。天能壁立極。國能退立限。青雲能靄

極。白雲能墜坐向伏限。青海原者棹柁不干。舟艦能至

留極。大海原爾舟滿都都氣氏。自陸往道者荷緒縛堅氏。

磐根木根履佐久彌氏。馬爪至留限。長道無間久立都都

氣氏。狹國者廣久。峻國者平久。遠國者。八十綱打挂

氏引寄如事。皇太御神能寄奉波。荷前者。皇太御神能

大前爾。如横山打積置氏。殘乎波平聞看。又皇御孫命

御世乎。手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉。茂御世爾幸

閉奉故。皇吾睦神漏伎神漏彌命登。宇事物頸根衝拔氏。

皇御孫命能宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久登宣。

今夫智識を世界に求め大に皇基を振起すと云ひ、開國進取と云ひ、若しくは、帝國主義と云ふ。而も、皆此の祈年祭の文句の外に出でず。此の如き崇高雄大莊嚴の文字、單に文學として之を見る、眞に萬古の心胸を開拓する概あり。矧や列聖の鴻業祖宗の遺烈、悉く皆此の中に含蓄せらるゝに於てをや。吾人は帝國主義を古の羅馬人に求むるに及ばず、現今の英獨人に倣ふを要せず。苟も之を一讀せば、思半ばに過ぎん。但、誤解なきを望む。皇室中心主義は皇室を中心とする主

陰曆二月四日風雨の災害なく、年穀豊熟せんことを神祇に祈禱する祭をいふ。

西紀前半世紀頃即ちシーザー時代のローマ人。

義なり。皇室を中心とするが故に、人民を無視するにあらず。皇室を畏れながら宗家とし、之を仰ぎ、之を崇め、之を本體とし、大和民族悉く之を簇擁し、皇室の隆昌と與に民族の繁榮を期するが如く、日本中心主義も日本を中心とするが故に、世界を無視するにあらず、凡そ世界のあらゆる長所・善所・美所は、八十綱打掛けて之を我に採用し、而して、我が國光を白雲の垂るゝ限り、青波の洗ふ極みまで、發揚せんとするに外ならず。苟も然らざらんか、日本中心主義は是夜郎自大主義なり。支那人が自ら中華を以て居り、他を夷狄視するものと何の擇ぶ所かある。

惟ふに、維新の大改革や、畢竟、内に皇室中心主義を宣明し、外に日本中心主義を實行する端を啓きたるに過ぎず。我が陛下の御踐祚と同時に、屢、祖宗の宏謨といふ語を御言明あらせ給ふは、蓋し陛下の自ら期し給ふのみならず、更に臣民に向つて、陛下御統率の下に、嚮ふ所・由る所を示し給ふ聖慮に外ならざるなり。

皇室中心主義の歸著する所は忠君なり、日本中心主義の歸着する所は愛國なり。忠君愛國は偶然に生ずるものにあらず、必ず其の淵源なかる可からず。吾人は之を一に祖宗の宏謨に溯りて求むるを以て、最も確實に、且、根據ある斷定と認む。而も、此の忠君や、日本帝國を一家とし、皇室を家長として然るなり。此の愛國や、世界を大觀し、日本を其の原動力として然るなり、中心點として然るなり。（蘇峰文選）

三 明治天皇御製

家と人ありては世は成るべし

人なくしては世は成らざるべし

身の中は直せば世は成るべし

身を直せば世は成るべし

心の中は直せば世は成るべし

心を直せば世は成るべし

美木植はては世は成るべし

美木を植はては世は成るべし

國の治はては世は成るべし

國を治はては世は成るべし

世の中は直せば世は成るべし

世を直せば世は成るべし

あやまちをあらわすに物もな

まらぬ友のこころたのむ

よあはれをいふよきこと

なれかしこめ入るるけり

あはれをいふはたはた

しるす事よき事なるはた

あはれをいふはたはた

しるす事よき事なるはた

あはれをいふはたはた

しるす事よき事なるはた

あはれをいふはたはた

しるす事よき事なるはた

男は海をなげしを思ふ毎に
たも海風のさちちとあはれん

さしに民をさかしのめをたす

我が世をよものまほ持の大神

静のふはなほにまうにまうの

さかづきあげむ時をまたさ

四羽衣

本文句讀點は凡て
諸本に従ひ、送假
名も多くは諸本に
従ひ、傍訓は觀世
流にて嚴重に教ふ
るところに従ひて
附したり。
一聲、サン、下歌、
一歌、カ、ルは皆
諸ひ方の名稱、ク
リ、クセは部分の
名稱なり。
風早の三保の浦わ
なご舟の舟人騒
ぐ波立つらしも。
(萬葉集)
駿河國清水港の南
に突出せる松原。
詩人玉屑には「千
里の野山に雲乍ち
に斂り」とあり。
こゝには之をかへ
て用ひたり。
晴れたりといふべ
きところなり。
忘れずよ清見が關
の波間よりかすみ
て見えし三保の松
原。(中務卿)

ワキ三人^三風早の^三三保のうらわを漕ぐ船の浦人騒ぐ。波路かな

サシ^一これは三保の松原に。伯良と申す漁夫にて候。三人^三萬里の

高山^{カウ}に雲忽ちに起り。一樓の明月^{メイグ}に雨始めてはれり。げにの

どかなる時しもや。春のけしき松原の波立ちつゞく朝霞。月

も残りの天の原及びなき身の眺にも。心そらなるけしきか

な^{下歌}忘れめや山路を分けてきよみ瀉遙かに三保の松原に

立ちつれいざや。通はんく^{上歌}風向ふ。雲のうき波立つと見

て。く。釣せて人や歸らん。待てしばし春ならば吹くもの

どけき朝風の。松は常磐の聲ぞかし。波は音なき朝なきに。釣

風むかふ雲の浮波
立つと見釣せぬ
先にかへる舟人。
(藤原爲相)

人おほき。小船かなく。われ三保の松原にあがり。浦の
景色をながむる處に。虚空に花降り音楽聞え。靈香四方に薰
ず。これ唯事と思はぬ處に。これなる松に美しき衣懸れり。寄
りて見れば色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて
歸り古き人にも見せ。家の寶となさばやと存じ候。のう
其の衣は此方にて候。何しに召され候ぞ。これは拾ひ
たる衣にて候程に取りて歸り候よ。それは天人の羽衣
とて。たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとの如くに
置き給へ。そも此の衣の御主とは。さては天人にてまし
ますかや。さもあらば末世の奇特に留めおき。國の寶となす
べきなり。衣を返すことあるまじ。悲しやな羽衣なくて

は飛行の道も絶え。天上に歸らんことも叶ふまじ。さりとは
返したび給へ。此の御詞を聞くよりも。いよく伯良
力を得。固より此の身は心なき。あまの羽衣取隠し。叶
ふまじとて立ちのけば。今はさながら天人も。羽なき鳥
の如くにて。あがらんとすれば衣なし。地に又住めば下
界なり。とやあらんかくやあらんと悲しめど。伯良
衣を返さねば。力及ばず。せん方も。なみだの露の玉
鬘。かさしの花もしをくと。天人の五衰も目の前に見えて
あさましや。天の原。振放け見れば。霞たつ。雲路まどひて。
ゆくへ知らずも。住馴れし空にいつしか行く雲の羨まし
き景色かな。迦陵頻伽の馴れし。聲今更にわづか

衣塵埃に染む。
花鬘萎む。
兩腋汗出づ。
眼眩く。
本處を樂しまず。
(二) 丹後風土記に出て
たる歌。

なる。鴈がねの歸り行く。天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の
 沖つ浪往くか還るか春風の空に吹くまでなつかしや。く
 給はゞ衣を返し申すべし。うれしやさては天上に歸ら
 んことを得たり。この悦にとともさらば。人間の御遊の形見
 の舞。月宮を廻らす舞曲あり。只今ここにて奏しつゝ。世のう
 き人に傳ふべし。さりながら。衣なくては叶ふまじ。さりとして
 はまづ返し給へ。いや此の衣を返しなば。舞曲をなさて
 そのまゝに。天にやあがり給ふべき。いや疑は人間にお

(一) 支那の陳の代に作
 れりといふ舞曲。

(二) 東國地方の風俗歌
 舞。

(三) 伊弉諾伊弉册の二
 神。

先を給へ。いや此の衣を返しなば。舞曲をなさて
 給はゞ衣を返し申すべし。うれしやさては天上に歸ら
 んことを得たり。この悦にとともさらば。人間の御遊の形見
 の舞。月宮を廻らす舞曲あり。只今ここにて奏しつゝ。世のう
 き人に傳ふべし。さりながら。衣なくては叶ふまじ。さりとして
 はまづ返し給へ。いや此の衣を返しなば。舞曲をなさて
 そのまゝに。天にやあがり給ふべき。いや疑は人間にお

り。天に偽なきものを。あらはづかしやさらばとて。羽衣
 を返し與ふれば。少女は
 衣を着しつゝ。霓裳羽衣の
 曲をなし。天の羽衣風に
 和し。雨に潤ふ花の袖
 一曲を奏で。舞ふとか
 や。東遊の駿河舞。く
 此の時や。始めなるらん
 それ久方のあめとい
 つば。二神出世の古十方世界を定めしに。空は限もなければ
 とて。久方の空とは名づけたり。然るに月宮殿の有様。玉

斧の修理長へにして。同 白衣黒衣の天人の數を三五に分つ

（和貫之）
春霞たなびきにけり久方の月の桂の花や咲くらん。
（和貫之）
（修正通照）
天つ風雲の通路一
さちよ少女の姿
しばしといめん。
（和貫之）

て。一月夜々の天少女奉仕を定め役をなす。我も數ある天少女。月の桂のみをわけて假に東の駿河舞世に傳へたる。曲とかや。春霞たなびきにけり久方の月の桂の花や咲く。けに花鬘色めくは春のしる

しかや。面白や天ならで。こゝも妙なり。天つ風雲の通路吹閉ちよ。少女の姿暫しとゞまりて。此の松原の春の色をみほが

君が代は天の羽衣
まれにきてなつと
もつきぬ巖なるら
ん。（拾遺）

笙歌遙に聞ゆ孤雲
の上、聖衆來迎す
落日の前。
（大江定基）

蘇命路、蘇迷廬、
一に須彌山ともい
ふ。

ワカ、謠ひ方の名
稱。

キリ、曲の終の一
節の名稱。

さき。月清見湯富士の雪いづれや春の曙。たくひなみも松風ものどかなる浦の有様。其の上天地は何を隔てん玉垣の内外の神のみするにて。月も曇らぬ日の本や君が代は。あまの羽衣まれにきて。撫づとも盡きぬいはほぞと。聞くも妙なり。東歌聲そへて數々の笙笛琴篋。籥孤雲の外にみちく。て。落日の紅はそめいろの山をうつして。緑は波にうき島が。はらふ嵐に花ふりて。實に雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。

南無歸命月天子。本地大勢至。東遊の舞の曲。或は。天つみそらの緑の衣。又は春たつ霞の衣。色香もたへなり。少女のもすそ。左右。さいうさつさつ。の花をかざしの天の羽袖。靡くも返すも。舞の袖。東遊のかずくに。

もと宮人と書きたりしが、草書體の似寄りたるところより誤りて色人となりたるなり。(實生流にては今も宮人と謠へり)。觀世流にてはイロビトと謠ふなり。
法華經には金・銀・珊瑚・磲磬・瑪瑙・眞珠・玫瑰とあり。經によりて小異あり。

其の名も月の色人は。三五夜中の。そらに又。滿月眞如の影となり。御願圓滿國土成就。七寶充滿の寶をふらし。國土にこれを施し給ふさるほどに。時移つて。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原うき島が雲の。あしたか山や富士の高嶺。かすかになりて。天つ御空の霞にまぎれて。失せにけり。

(觀世流謠)

五 音樂

田邊尚雄

試みに一曲の歌謠を聽け。吾人は之によりて得る感興に二箇の要素あるを發見すべし。一は其の歌謠の意義が我が心を動かすものにして、一は其の音聲の高低緩急抑揚強

弱、概言すれば、其の曲節が我が情を刺衝するものなり。されど、歌謠をなせる言語の意義は、文字に寫して、目之を見るも、またよく之を解するを得。其の音樂的要素にあらざるや、論なし。されば、歌謠のよく音樂たるは、一に其の音聲の曲節に存すること、明かなり。而して、曲節は言語より其の意義を除去したる音聲の上にあり。かく言語をなさざる音聲は、即ち、また、器樂の依つて立つ所以の基礎なり。吾人は固より音聲其のものに一種の快美を感ず。是恰も色彩其のものを見て喜ぶと同じ。一つの音が耳に快にして、他の音が耳に不快なるは、是がためなり。されど、吾人は別にこの感覺的快美の感より、進んで其の音聲に何等かの

表象あるを感ずるなり。其の或は高く昂り或は低く沈み、或は悠揚として長く或は急迫にして短き、一々皆吾人の心情と相應ずるにあらざるはなし。吾人は且く之を名づけて情を含める聲音といはん。この聲音は、人々みな其の軌を一にして互に扞格することなきが故に、吾人は耳に他人の聲音を聽いて心直ちに之に感應し、敢て謬ることなし。而して、此の如き關係は、廣く之を推してあらゆる聲音に及すを得べし。蟲吟・鳥語の如き、松韻・濤聲の如き、若しくは、金石相撃ち、風絃相鳴るが如き、自然界の聲音に對し、人の之を聽いて或は泣き或は笑ふは、皆是と理を同じうす。畢竟、言語をなさざる聲音に、吾人の心情の表徴あるなり。器樂の

*
オーケストラの一
形式。

根本原理は實にこゝに存す。器樂は此の如き音聲の醇なるものを選び粹なるものを取りて、所謂樂音といふものを定め、絲竹管絃を假りて之を出さしめ、藝術に必須なる形式を之に附與して、複合構成せしものなり。而して、其の資料たる音聲と之を構成する形式とは、皆吾人の情生活と相應じて、一々其の表徴たるものならざるはなし。月夜にふきすさぶ一管の笛聲よりシムフォニーの大絃樂曲に至るまで、人の之を聽いて或は泫然として涙を流し、或は肅然として襟を正し、或は心神朗徹、遠く塵寰を脱して直ちに天地と冥合する感を生じ、或は煩悶懊惱、苦腸九廻する思をなし、我と樂と融合一致して、樂聲の入つて我が心情となれるか、は

た、我が心情の化し去つてかの樂聲となれるかを疑ふに至るもの、其の源は實にこゝにあり。要するに、器樂の樂聲は人の情の聲なり、人心の最奥處に潜める神祕なる琴線の動ける反響なり。

されど、言語をなさざる音聲は特殊の意義を有せざるが故に、器樂の表象する感情は一般的、抽象的たるを免れず。例へば、こゝに悲哀の情を託せる一曲ありて、吾人之を聽いて嗚咽するを禁ずる能はずとせん。樂曲の効果は是にて足れり。されど、其の悲哀が何の故に生じたる何様の悲哀なるかは、吾人遂に之を知ること無し。歡喜・平靜・苦悶、凡て皆此の如し。器樂のあらはすところは、特殊の人が特殊の境

遇に於ける特殊の感情にはあらざるなり。若し、此の如き感情の表象を望まば、吾人は之を言語に要めざるべからず、之を詩歌に要めざるべからず。

更に他の方面より之を見ん。人の感情は境によりてあらはれ、自然界の現象に應じて變化す。春和景明、風暖かに、霞たなびき、小川の流緩うして、岸邊の柳綠なり。人この光景に對すれば、氣暢び心ゆるやかにして、われまた雙肩胡蝶の翼に化し、翩々としてかの菜花に戯れんとする思あり。器樂はよくこの心神快暢の感をあらはすを得ん。されど、其の霞のたなびける狀、小川の流るゝ狀、もしくは、春風のゆるやかに柳條を梳る狀をばうつす能はず。此の如き敘述は、

また之を言語に要めざるべからず、之を詩歌に要めざるべからざるなり。

是に於てか、聲樂あり。聲樂は言語をなせる人聲、即ち、歌詞に旋律ある曲節を附せるものにして、詩歌と音樂との結合せるものなり。(音樂通解に據る)

六 趣味

眞正にして廣大なるものを感知するをテーストといふ。その何處に如何なる形にて現れるかは、問ふところでない。苟も美なるもの、秩序あるもの、善なるものを感知し、愛敬する心の作用をテーストといふ。テーストを、場合次第で、嗜

好又は、風尙と譯し、趣味とも譯し、鑑賞力・趣味性とも譯する。凡そ人が物のよしあしを判断するのは、多くは理智の作用のやうに見えるが、その實は、この趣味性がさせるのである。この性に原づかぬ批判は、冷かで、形式的で、感化・活動の力に乏しい。道德上・文藝上の事も、煎じつめると、皆この性に歸する。それ故、趣味といふことは決して等閑にすることは出来ない。

蓼喰ふ蟲も好きく。好きとなつては、理窟はどうでも、それが欲しく、嫌と思つては命も捨てかねぬが人情。そこに、人生の意地も籠れば、浮世の味も生じ、古今東西の文華の異同も根ざしたのである。「お前の趣味は卑しい。」と言はれた

とて、面白いものはやはり面白く、理窟ではそれをどうすることも出来ない。他人の上をどうすることも出来ないばかりでなく、自分の趣味さへ、年齢で變り、境遇で變り、四季で變り、時刻で變るのだから、始末にいかぬ。氣分のよい時と悪い時とでは、物の味がちがふ。嬉しい時にはまづい物も旨いが、腹の立つた瞬間には一切が氣にいらぬ。運動不足の、神經過敏の、贅澤な舌には、如何なる割烹もうまくなき、細君の苦心を思ひやる事も出来ず、圖らずも、家庭に悲劇の伏線を作ることもある。まして、一國一社會となつては、趣味の變遷に著しい差別があつて、それに原づく利害も僅少でない。

國民の趣味は、國俗の本源である。かの文藝を重んじて、移風易俗の要具とするのも、畢竟文藝が趣味性涵養の最大機關であつて、國民の善惡美醜の評價力が偏にこの趣味性の高下に依つて定まるからである。神代から奈良朝までのことは、姑く措き、平安朝から鎌倉東山・桃山・元祿・享保・文化文政と變遷して來た、我が國民の過去の趣味性を見れば、國家隆替の因果までが、明かにそこに見えぬ様である。希臘羅馬の古きより、近くは、伊太利・西班牙・土耳其の趣味性を檢するに當つても、若し見る人に活眼があつたら、また同じ様な感が起るであらう。

趣味には雅俗の別があり、大小・強弱・淺深・單複・濃淡の別が^明あ

(一) 足利義政時代。
 (二) 豊臣時代。
 (三) 徳川綱吉の治世。
 (四) 徳川吉宗の治世。
 (五) 徳川家齊の治世。
 (六) 西紀前一世紀頃建國。

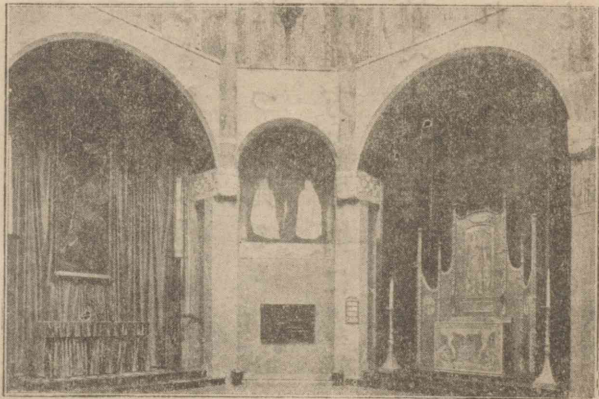
る。我が國の趣味は、其の大と強と深と複と濃とに於ては、今までの處、西洋のに及ばぬ。これには、國民性や氣候や風土や飲食物等に原づく生理上の原因もあらうし、政治・宗教・道德・風俗の感化に原因する所もあらう。我が國民の在來の趣味は概して、淡々しく、細かく、あかるい、而して、甚だしく悲しく、甚だしく凄じく、甚だしく怖しいやうなものはない。桃山や元祿や享保は、或は華美雄大、或は豪奢淫靡だ、といふが、決して、西洋の如く大袈裟でもなければ、毒々しくもない。我が國の雅致・風流・瀟洒などいふ味は、多分、西洋の趣味史にはあるまい。あちらへ行つたことがないから、臆測に過ぎないが、西洋の華麗・風雅などいふのは、我が國のに比へては

大分あくどい・餘程俗に近いもののやうである。

又、或人の話によると、歐洲にいつて室内裝飾の模様を見ると、濃厚なる色彩・緻密なる繪畫・多様なる彫刻・五彩陸離として、美しいことは如何にも美しいが、それが、少し長く見てゐると、ちきりに倦厭を感じて來る。又、好事者といふ人の居間に入つて見ると、興味の深いものが陳列してはあるが、その陳列方が如何にも雜然たるもので、殆ど己の所有品を悉く竝べ立てたやうで、宛ら博物館を觀るやうな感が起る。されば、長時間に亙る時は、勢ひ倦厭の念の起るのを禁ずることが出來ぬとのことである。

我が國人の趣味としては、所有品を一時に竝べ立てるやう

なことは決してしない。

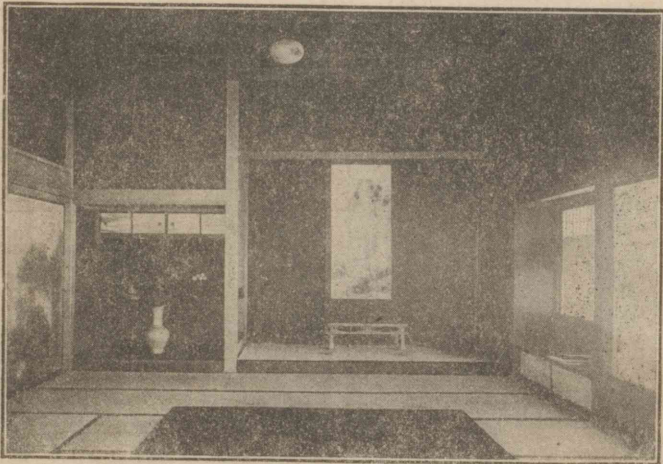


西洋の洋間

殊に客間の飾付に於ては、床の間に懸くる幅は季節又は客に相應するものを選び、床の間に活くる花卉は勿論、花器・床飾及び、その他の調度に至るまで、悉皆その幅に調和するものを選んで、體裁よく排列し、斯くて、客をして、神澄み、氣爽かにして、自から快然たるものあらしめるやうに力める。

繪畫に於ても然うである。畫家は、縑紙の全部を塗抹するやうなことは、決してしない。必ず全幅の中に空白を存し

ておく。而して、その空白の處に觀る者をして相當の繪を



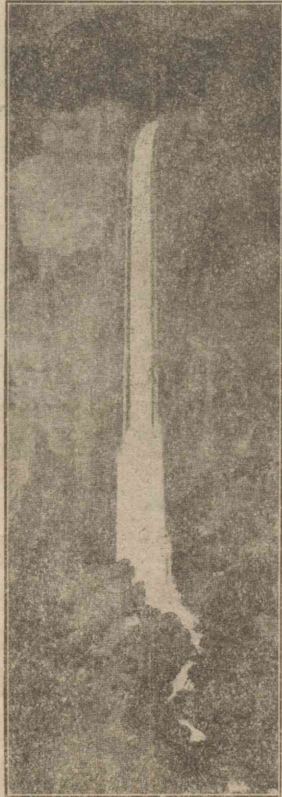
日本客間

認めしめるやうにする。是に於て、繪はそこに充實し、妙味はそこに限なく涌いて來るのである。趣味の性質は此の如く、東西相異つては居るが、ともかく、趣味は、善惡・美醜の甄別の根柢となるものであるから、その涵養には常に深く注意しなければな

らぬ。(坪内雄藏の文及び久保田米隱の文に據る)

七 日本繪畫の流派

我が國の畫は平安朝に巨勢金岡出でて漸く盛なり。當時



金岡筆那智の瀧

は主に佛畫のみを描きしが、藤原基光は形態の



光長筆大伴言繪卷(その一部)

寫實と色彩の精巧とを特色として、花鳥山水風俗凡てを描き出して、一派を創めたり。繪卷物として寺院の縁起などを

二六四一六三頃の人

二六四一六三頃の人

永正三年(二六六)寂す。

畫きたるもの、鎌倉時代にありて最も隆盛を極め、佛畫は其の餘波を被りて、莊重の風を失はんとするに至れり。藤原隆能、宅磨爲氏、宅磨爲成、春日光長、藤原信實、鳥羽僧正等は皆此の派の名手なり。この派を倭繪派と總稱す。又後世の土佐住吉に對して、古土佐派とも云ふ。

東山時代に至りて、倭繪の艶麗なるに反して高雅なる漢畫の様式を傳へたり。如拙、周文明、兆宗、丹など名あるが中に、僧雲舟は宋元の畫風に倣ひて好みて減筆畫を作りしが、其の特色は寫意を旨として形似を力めず、筆力豪健なり。門下に名手輩出し、畫界に變動を與へたり。世に之を雲谷派といふ。

雪舟の一派は丹青の色彩よりも水墨の筆意を重んじたるが、様式和漢を兼ねて寫實に寫意に應用自在なるは、狩野派



(部一のそ) 水山筆舟雪

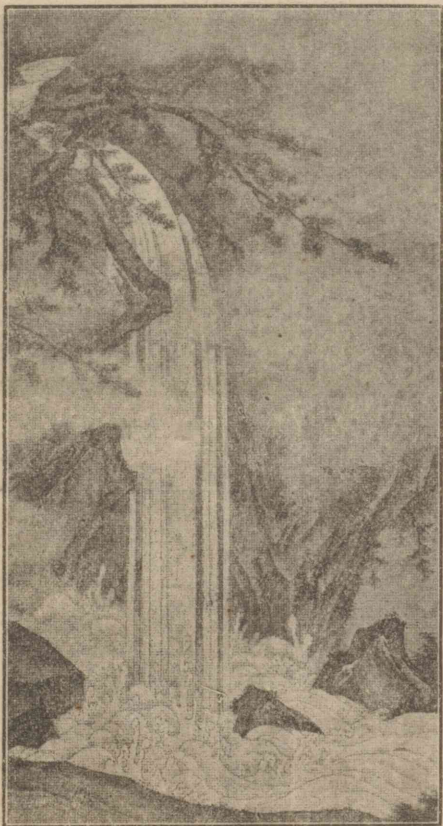
(一) 延徳二年(三三〇)歿す。
(二) 永祿二年(三三三)歿す。

なり。狩野正信その祖にして、周文・宗丹に學び、是に古土佐の法を加へて折衷したるものなり。正信及び、その子元信

(一) 寛永十二年(三三九)歿す。

(二) 延寶二年(三四四)歿す。

は最も筆格精嚴なりしが、山樂に至つては桃山時代の豪華の風を受けて、構圖の雄大・色彩の華麗に意を用ひたり。江戸時代に至



瀧大筆信元野狩

りて探幽齋守信不世出の技を以て、家法に加ふるに雪舟の

法並に、宋元名家の意を以てし、其の畫法を大成し、家門隆盛を極め、以後三百年の久しき間、畫界の權威たりき。尙信・安信亦各、其の風趣を發揮したり

元祿四年(三三三)歿す。

寛文二年(三三三)天和三年(三三三)



探幽筆山水

漢畫の渡來以來振はざりし倭畫は、土佐光起出でて、盛名一時に鳴りたれども、上代の風格を失ひ、彩色穠麗なれども筆法活氣なく、只漢畫の流を酌みて僅かに生面を開くに止まりき。
土佐光則の弟如慶、後西院天皇の勅命によりて、住吉慶恩の家を再興し、その子具慶幕府に仕へて、狩野と並びて繪所となりしが、させることもなかりき。江戸時代の

寛永十四年(三九七)歿す。

享保元年(三三七)歿す。



爲恭筆童子の圖

末に、田中訥言・浮田一蕙・岡田爲恭の如き名工出で、各古土佐

の眞髓を得んと勉めたれども、力足らずして、終りぬ。

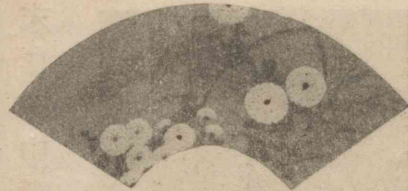
然描寫の精神を得たる事なり。この精神は即ち倭畫の精神にして、則ち倭畫は此に復活したりと見るべきなり。尾形光琳、初め安信に學び、後光悅の遺法により、遂に轉じてこ



光琳筆松竹梅(その一部)

の派の畫風を完成せり。故に、この派また光琳派ともいふ。光琳の畫風は、時恰も元祿の盛世に會したる故に、傳彩放膽にして、着筆豪邁の趣あり。かくて、又、圖案模様の

尾形乾山酒井



光琳筆

方面にも一大勢力をなせり。抱一共に此の派の名手なり。寶永享保の頃、祇園南海、明末清初の畫風を摸して初めて南宗畫を描き出しぬ。南宗畫とは、宋元の畫を北宗畫と云ふに對して、明清の

畫をいへる名なり。

抑、支那に於て北宗畫といへるは院畫、即ち、専門家の畫ける



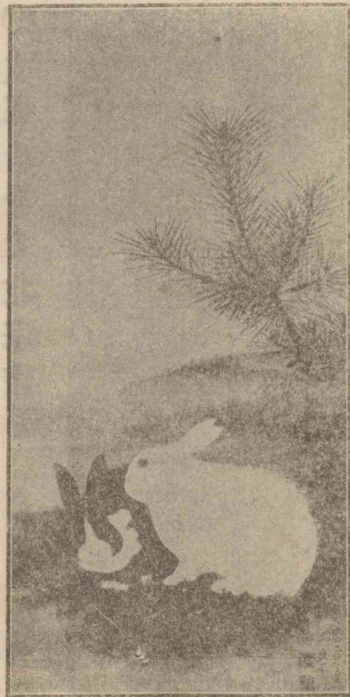
大雅堂筆那智瀑(その一部)

畫のこ
とにし
て南宗
畫とい
へるは
文人の
間に行

はれし畫のことなり。その南宗畫は明清に至つて全盛を極め、幾多の流派を生じたるが、大別して、花鳥を描ける精緻

濃艶なる一派と山水を主題とせる雅朴淡彩なる一派とに別つことを得べし。この内の山水畫は特に文人畫と稱せらる。

我が國に於ては、南海につぎて柳澤淇園池野大雅與謝蕪村、ト行ハ其の他名家の續出するありて、遂に一大流派をなせり。後



(部一のそ) 兔に松小筆舉應

狩野派より出で、明畫を慕ひ、又、西洋畫の法則を參酌して、盛

の山本梅逸田能村竹田渡邊華山の如き、皆此の流を酌めるものなり。

寛政七年(二四三)發す。

書廊

に自然描寫を試み、茲に一新機軸を出したり。世に之を圓山派といふ。筆致の輕妙にして、墨痕の艶美なるは、此の派の特長なり。其の溫雅明麗なるは、刷毛を用ひて平滑に色



(部一のそ) 風屏根彦筆衛兵又佐岩

彩の暈洩をなすにありて、光琳一派が岩繪具を用ひて豪放に筆を遣るものとは、全

く手法を異にせり。應舉の門人松村吳春は之に南宗畫の

趣を加へて、更に一層の温容を示せり。世に之を四條派と稱す。景文之を繼げり。

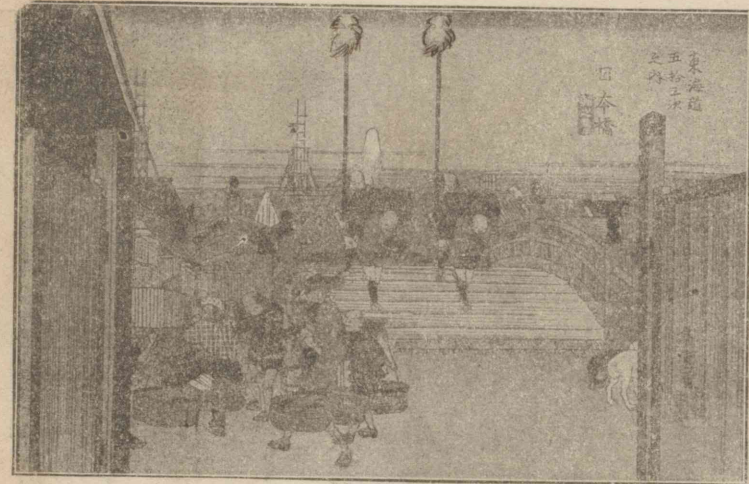
慶長年間、岩佐又兵衛、土佐光則に學び、精巧艶美の畫趣をなせり。多く時世粧の美人を畫きたれば、世呼んで浮世繪と稱す。菱川師宣、宮川長春、勝川春水、春章等出で、奥村政演を



(部一のそ)人美筆章春川勝

經て通俗の嗜好に投じ、鈴木春信に至りて、板刻の進歩と相

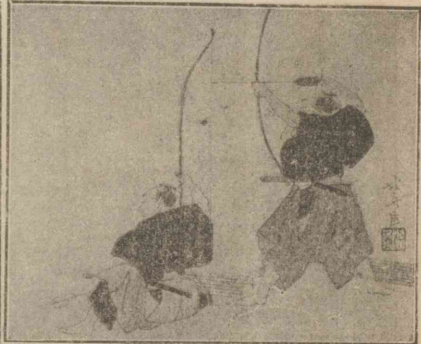
俟ちて吾妻錦繪を出すに至れり。喜多川歌麿の圓熟は其



橋本日筆重廣

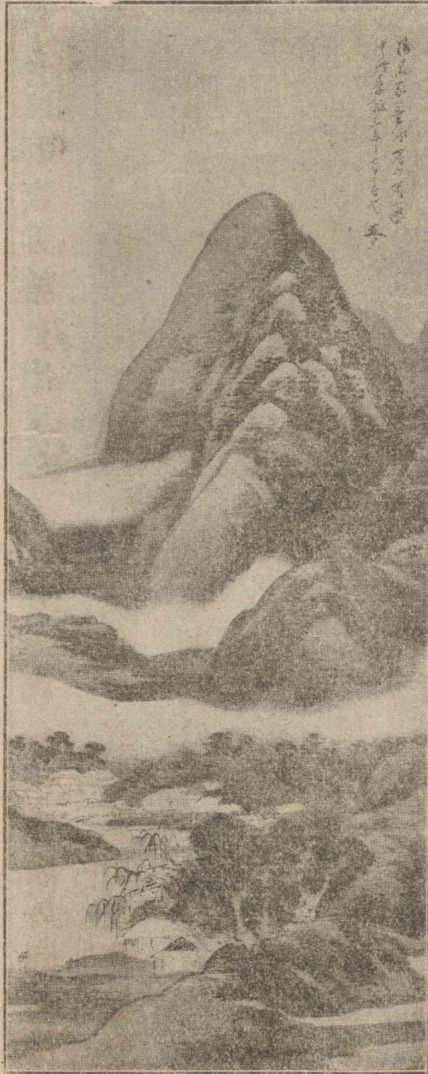
の極點に達し、歌川豊國等の役者似顔畫は廣く世に行はれたり。一立齋廣重は此の派にありて専ら風景を畫きて新生面を開拓したり。東海道五十三次、江戸百景等最も著はる。葛飾北齋は浮世繪に基礎を置き、明人の法を學び、西洋畫の遠近法を加へて、遂に一派を成せり。北齋派即ち是なり。北齋止水

*天保十一年(1800)歿す。



北齋筆大弓(その一部)

人物・花卉・鳥獸、往くとして可ならざるなく、北齋漫畫・北齋畫譜等の板畫多く行はれたり。かくの如く諸流の角逐する間にありて、之が統一を試みしは谷文晁なり。



文晁筆山水

南北折衷

山石は雲谷・狩野北宗の風を帶ぶれども、近景の草木は沈南蘋が妙趣を得、遠樹は南宗の體を傳へ、結構緊密、賦彩豊麗にして、用筆快豪なり。世に之を文晁派といふ。



容齋筆娥皇(その一部)

史畫の範を残したるが、其の畫風は主として狩野・土佐の融合にありたり。所謂容齋派これなり。容齋は、又常に洋畫折衷の必要を唱へたり。蓋し、現今の畫風を作成する端緒

を開けるものと云ふべし。
狩野芳厓も亦自家の畫風に加味するに洋畫の様式を以てして、其の面目を新にせり。世に之を芳厓派といふ。



(部一のそ) 音觀母悲筆厓芳

東京美術學校の創設せらるゝや、教授として橋本雅邦、川端玉章を迎へたり。次で、山名寛義、荒木寛

畝、下村觀山、寺崎廣業、小堀鞆音等教授として諸生を誘導し、

東京帝國大學文科大學助教授、文學博士。明治四十三年歿す。

英語のエキストラクトの略、精粹を抜き出したるもの意。

八 平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり。山川の風景行く所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を鍾め、群を抜いて立てるは京都なり。京都附近の景は、日本のすべての景をエキスにしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、曄麗幽艶の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意ヶ嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峰、高雄の山々、波濤の如く、西にやゝ隔りて愛宕、小倉、龜山、嵐山、松尾より山崎に至りて地勢窮る。松柏の綠色濃きなかに、或は目醒むるやうなる櫻の入交る

あり、或は紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などの、わけて、朝日・夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、子の日の遊に小松曳く樂など、いづれ劣らぬところから。南にやゝ隔りて男山これに對するが、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐもかしこし。京の東端に沿うて、鴨川の流、糺の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少しく離れて桂河、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく、また南にむかふ。二河南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、

跌宕の觀念を人心に與ふる材料に乏しといへども、一面よりいへば、山のうちにこもりて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配やゝ急なれば、蘆間に出入る白帆の、町の側を往來するながめなきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の礦物を含めるにや、曝す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸にうち上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などの居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしといへども、海なくして清き京都は益、清きなり。山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何處の山

水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるなるを知らば、三面を山にして、土地濕潤、水分を含むことの殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明かなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄かに高く、黒雲奔りて魔の如く、見るが内に重なりく、て海を覆ふ。波の音は雲の中にあり。電光閃々磨る墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か。世界は唯、一暗黒の中に没し去るかと思はれて、凄まじかりき。かくの如く壯絶なる景は、わが數年の滯留中、遂に京都にては見ることを得ざりき。されど、下京より吉田に通ひたる朝なく

*蒲團着て寝たる姿
や東山。(嵐雪)

の景色の、今も恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に三條の大橋の擬寶珠の、一つく、彼方へくと淡くなりて、向ふに寝たる東山は、未だあるかなさかの夢より覺めやらず、吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣のをと女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。時雨の景色の、又よその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて、直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は山河襟帶の平安京の特色なり。

(國文學全史)



九 日野の山奥

鴨長明

鎌倉時代の隠遁者。方丈記の作者として名あり。山城國宇治郡。

源信僧都の著。

今、日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、中には西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を請けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並に不動の像をかけたなり。北の障子の上に小さき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏・琵琶各一帳^張を立つ。所謂折箏・繼琵琶是なり。東の垣にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕の方に

すびつあり。これを柴折りくふるよすがとす。庵の北に少地をしめて、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはち、諸の藥草を植ゑたり。假の庵の有様かくのごとし。その處の様をいはゞ、南に笥あり。岩を疊みて水を溜めたり。林、軒近ければ、爪木を拾ふに、乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念の便なきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。語らふ毎に死出の山路を契る。秋は蝸の聲耳に滿てり。空蟬の世を悲しふかと聞ゆ。冬は雪を憐ぶ。つもり消ゆるさま罪障に譬へつべし。もし念佛懶く、讀經まめならざる時は、

〔一〕神樂歌に「み山には霞ふるらし外山なる正木のかづら色づきにけり。」
〔二〕「埋めたり」といふべきところ。

〔三〕「滿ちたり」といふべきところ。

〔一〕妄語
〔二〕綺語
〔三〕惡口
〔四〕兩舌

新古今集に「世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕行く舟の跡の白波。滿聲」
前掲の地圖に就きて見よ。

〔一〕白樂天の琵琶行に「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟。」
〔二〕權大納言源經信。琵琶の名手。
〔三〕琵琶曲の名。

みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また、恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば、口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ、何につけてか破らん。もし跡の白波に身を寄する朝には、岡の屋に行きかふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし楓の風葉をならす夕べには、潯陽の江を思ひやりて、源都督の流を習ふ。もし餘りの興あれば、しばし松のひびきに秋風の樂をたくへ、水の音に流泉の曲を操る。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。また、麓に一つの柴の庵あり。すなはち、山守が居る所なり。

〔一〕京都の北加茂。
 〔二〕〔三〕〔四〕〔五〕前掲の地圖に就きて見よ。
 〔六〕勝地本來定主なしすべし山は山を愛する人に屬す。
 〔七〕〔八〕地圖に就きて見よ。
 〔九〕近江國滋賀郡正法寺の觀音。
 〔一〇〕石山寺の觀音。
 〔一一〕琵琶の名手。逢坂の關に隱栖す。
 〔一二〕攝津の歌人。後近江國曾東山中に隱る。

かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。もし徒然なる時は、これを友としてあそびありく。かれは十六歳、われは六十。その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或は茅花を抜き、岩梨を採る。また、零餘子を盛り、芹を摘む。或は、すそわの田井に至りて、落穂を拾ひてほぐみを作る。もし日麗かなれば、嶺に攀ちのぼりて、遙かに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみ煩ひなく、志遠くいたる時は、これより峯續き炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間に詣で、石山を拜む。もしは、また、粟津の原を分けて、蟬丸翁があとをとぶらひ、田上川をわたりて、猿丸太夫が墓をたづね、歸る

〔一〕前掲の地圖に就きて見よ。
 〔二〕山鳥のほろ／＼となく聲きけば父かと思ふ母かと思ふ。
 〔三〕山ふかみなるかせぎのけちかき世に遠ざかる程ぞ知らる。
 〔四〕いふこともなき埋火をおこすかな冬のねざめの友しなれば。
 〔五〕山深みけちかき鳥の聲にせでものおそろしき梟の聲。
 〔六〕西行

さには、をりにつけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家苞にす。もし夜靜かなれば、窓の月に古人を偲び、猿の聲に袖を濕す。叢の螢は遠く眞木、島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ／＼と鳴くを聞きても父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても世に遠ざかる程を知る。或は埋火をかきおこして老の寐覺の友とす。恐しき山ならねど、梟の聲を憐むにつけても、山中の景氣折につけて盡くることなし。況や深く思ひ深く知れらん人の爲には、これにしも限るべからず。〔方丈記〕

10 遠山櫻

遠山櫻

はるかに花を咲かすもあはれ
おもひのこころをいかに

梅はら

ゆきわたるのうしろにありて
うららかに花を咲かす

雪のうしろ

はるかに花を咲かすもあはれ
おもひのこころをいかに

はるかに花を咲かすもあはれ
おもひのこころをいかに

はるかに花を咲かすもあはれ
おもひのこころをいかに

はるかに花を咲かすもあはれ
おもひのこころをいかに

はるかに花を咲かすもあはれ
おもひのこころをいかに

靴の聲

よみ人
知らず

よみ人知らず
靴の聲をききし
はなはたしき
ことなり

よみ人知らず
靴の聲をききし
はなはたしき
ことなり

舞妓

よみ人知らず
あはれ
おどろき
おどろき

流の流より梅を

あはれよめる

を茶室平助信

よみ人知らず
あはれよめる
おどろき
おどろき
おどろき
おどろき
おどろき
おどろき

元祿二年四月上旬の頃。

三關は古は伊勢の鈴鹿關、近江の不破關、越前の愛發關をいへり、後愛發を廢して山城の逢坂の關を加へたり。こゝにては何を指せるか不明。

後拾遺集、能因法師、都をば霞と共にたちしかど秋風ぞふく白河の關。

千載集、源賴政、都にはまた青葉にてみしかども紅葉ちりしく白河の關。

橋爲仲集に、人傳に聞き渡りしを年ふりて今日雪そへぬ白河の關。

五月五日

宮城郡市川村多賀城址にあり。

二 奥の細道

松尾芭蕉

日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて、旅心定りぬ。この關は三關の一にして、風騒の人心を留む。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。

名取川を渡りて仙臺に入る。あやめ葺く日なり。畫工加右衛門一日案内す。宮城野の萩しげりあひて、秋の景色おもひやらる。玉田横野つゝじが岡はあふひ咲く頃なり。藥師堂・天神の御社など拜みて、その日は暮れぬ。

つぼの石ぶみは、高さ六尺餘、横三尺ばかりか。苔を穿ちて

現存の多賀城碑の文は左の通りなり。

「多賀城」

去京一千五百里

去蝦夷國界

去常陸國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

去下野國界

文字幽なり。四維國界の里數をしるす。此城、神龜元年、按

察使鎮守將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年、參議

東海東山節度使同將軍惠美朝臣朝獮修造也。十二月朔日

とあり。昔より、よみ置ける歌枕、多く語り傳ふと雖も、山崩

れ川流れて、道あらたまり、石は埋んで土にかくれ、木は老い

て若木にかはれば、時移り、代變じて、その迹たしかならぬこ

とのみなるを、疑もなき千歳の記念、今眼前に古人の心を闕

す。行脚の一徳、存命の悦、羈旅の勞を忘れて、泪おつるばかりなり。

それより、野田の玉川、末の松山を尋ね、鹽釜の浦に入相の鐘

をきく。五月雨の空、聊か晴れて、夕月夜幽に、籬が島も程近

りなり。

陸前の國鹽竈町にあり。
元祿二年伊達綱村造營。

藤原秀衡の第三子忠衡。よく父の遺命を守り、義經に従ひて高館に戦死す。

し。蚤の小舟漕連れて、さかな分つ聲々いと哀なり、
あくる日の朝、鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱
ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階、九仞にかさなり、朝日、朱
の玉垣をかゝやかす。かゝる道のはて、塵土の境まで、神靈
あらたにましますこそ、わが國の風俗なれと、いとたふとし。
神前に古き寶燈あり。かねの扉の面に、文治三年和泉三郎
寄進とあり。五百年來の佛、今眼の前に浮びて、そゞろに珍
し。かれは勇義忠孝の士なり。佳名今に至りて慕はずと
いふ者なし。誠に、人はよく道を勤め、義を守るべし、名もま
たこれに従ふといへり。日既に午にちかし。船をかりて
松島にわたる。その間二里餘。雄島の磯につく。

支那湖南省の北部にある大湖なり。
支那浙江省杭州府にあり。

元和の頃の名僧。

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ
洞庭、西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江
の潮をたふふ。島々の數を盡して、欵つものは天を指し、臥
すものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重に疊み
て、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり。兒
孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉、汐風にたわみ
て、屈曲、おのづから矯めたるが如し。その氣色、窅然として、
美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神代のむかし、大山づみのな
せる業にや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を盡
さん。
雄島が磯は、地つゞきて海に出でたる島なり。雲居禪師の

別室の迹座禪の石などあり。また松の樹蔭に世を厭ふ人と見えて、落穂・松笠などうち煙り草の庵しづかに住みなしたる、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしくて、立ちよる程に、月海にうつりて、晝のながめ復あらたまりぬ。江上に歸りて、宿を求むれば、窓をひらき、二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ怪しきまで妙なる心地はせらるれ。十一日、瑞巖寺に詣づ。當寺三十二世の昔眞壁平四郎出家して入唐歸朝の後、開山す。その後、雲居禪師の徳化に依りて、七堂葺改りて、金碧の莊嚴、光を耀し、佛土成就の大伽藍とはなれりけり。

十二日、平泉へと心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞傳へ

松島村にあり。禪宗。
法名を法身といふ。

陸中國西磐井郡。鎮守府のありし處。

孟子に、芻蕘者往焉、雉兎者往焉。
萬葉集、大伴家持、
「すべらぎの御代
榮えむと東なるみ
ちのく山に黄金花
さく」。

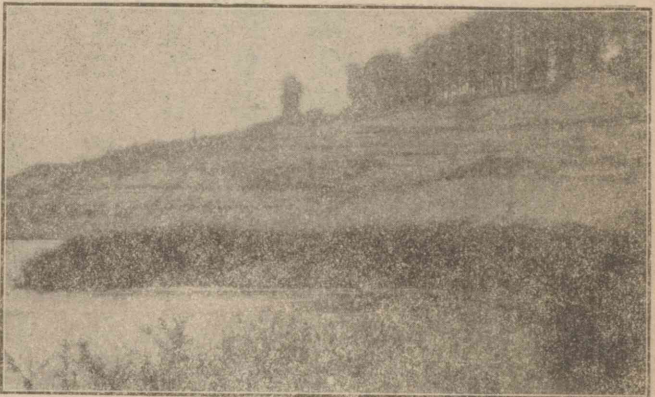
陸前國桃生郡橋浦村にありといふ。
石巻の東一里牧山の地かといふ。眞野に近し。
陸前國牡鹿郡稻井村大字眞野。
陸前國登米郡登米町。
藤原清衡一基衛一秀衛。

て、人稀に、雉兎芻蕘の往きかふみち、そことも分かず。遂に路踏みたがへて、石の巻といふ湊に出づ。「黄金花咲く」と詠みて奉りたる金華山、海上に見渡し、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひて、竈の煙立ち續けたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更にかす人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば、復知らぬ道迷ひ行く。袖のわたり尾ぶちの牧、まの萱原など、よそ目に見て、遙なる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふところに一宿して、平泉に到る。その間二十餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀、一睡の中にして、大門の址は一里こなたにあり。

(一) 伽羅御所

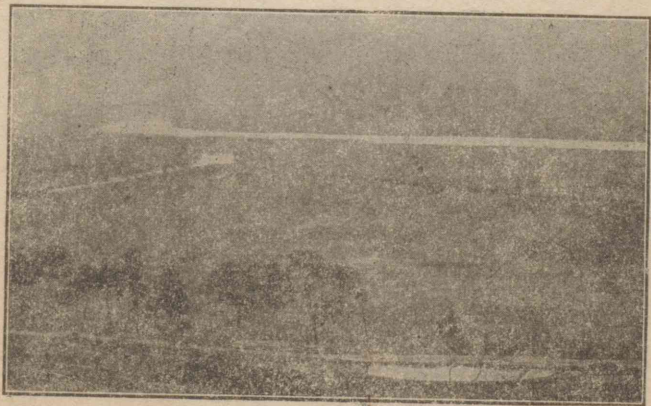
(二) 義經の居れる處。



高館

和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊蹟

秀衡が館の墟は田野になりて、金鶏山のみ形を遺す。まづ、高館にのぼれば、北上川、南部より流るゝ大河なり。衣川は

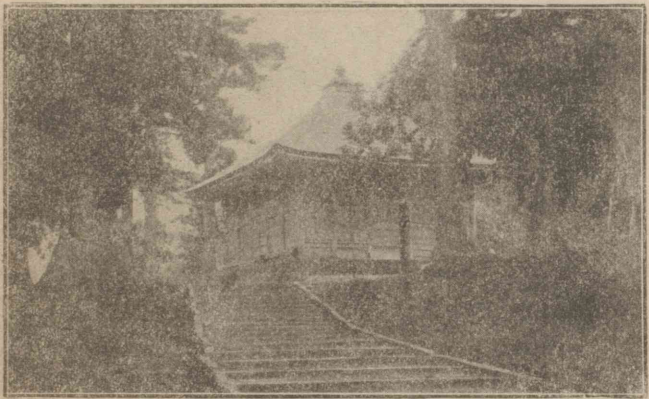


衣川古川戦場

(三) 秀衡の三男泉三郎忠衡。

金堂の
蘇の
色
二

(一) 經堂・光堂。
(二) 中尊阿彌陀、夾侍觀音・勢至。
(三) 金・銀・瑠璃・玻璃・碑・礎・瑪瑙・眞珠。



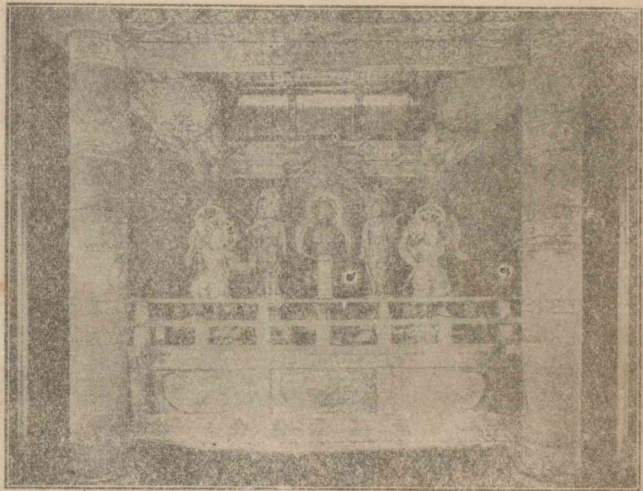
金堂蓋屋

は、衣が關を隔て、南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すくつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。

「國破れて山河あり。城春にして草青みたり。」と、笠打敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草や、つはものどもが 芭蕉 夢のあと。

かねて耳驚したる二堂開帳す。經堂は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて、珠の屏風にやぶれ、



金 色 堂 内 部

黄金の柱霜雪に朽ちて、既に頽
廢空虚の叢となるべきを、四面
新に圍み蔓を覆ひて、風雨を凌
ぐ。暫時千歳の記念とはなれ
り。

五月雨の

降りのかしてや、

光 堂。

芭 蕉

(奥の細道)

三 嫁 菜

元日や、はれて雀のものがたり。

服部 嵐雪

憂きことになれて、雪間の嫁菜がな。

捨 女

骸骨の上を粧うて、花見かな。

上 島 鬼貫

春の海、ひねもすのたり／＼かな。

谷口 蕪村

長持に春かくれゆく衣がへ。

井原 西鶴

五月雨や、ある夜ひそかに松の月。

大島 蓼太

曇るなよ、名は末代の秋の月。

杉田 望一

牛叱る聲に鳴たつゆふへかな。

各務 支考

化物の正體見たり、枯尾花。

横井 也有

旅に病んで、夢は枯野をかけまはる。

松尾 芭蕉

來年は／＼と暮れにけり。

澤 露川

一三人の新盆に

提燈 樋口一葉

待つわね月あつらふまはるし今年もはら
 帯からさくらさくらを土路にさへおれり
 申し借窓の釣りたる提燈の影まはるし
 ちかちかつけらさびし事思ひさげ
 にまゝて清ちかちかと思ひやうし申す
 こぞの此頃けまはる清妹子様は病もさ
 けまはる私屋後の蓮池ふその花折りを抱し
 まゝ浮葉の露のまはるさくらをさながら

雨らんと片子を岸の小松にかけ給え
 清傘さすの給ふはよは結りのあ
 けんけらあもはるさくらわらわ有様
 かまど唯今のやうに思はるを今年も
 門たに迎へてはるまゝ清魂あまの柳の
 うらよみそ萩の川の向うに送給え
 清傘おろげはるゆめあつらふまはる
 もももまがら唯一人なるは中あなれ
 にさむらわのう地雲目差くくせ

水を嗜かす思ひ出でる様
 には、麗あかき心ゆくやうに思ひ出でる
 思ひ出でるやまを思ひ出でる
 名物の達の花の了りもたせきし出で
 清供へもさうばあきくお花の中は林檎
 けりおけりおけりおけりおけり
 おけりおけりおけりおけり
 おけりおけりおけりおけり

名古屋藩士、俳人
 俳文家、天明三年
 歿す。

もし鳴かば蝶々籠
 の苦を受けん。

(宗因)

三 莊周夢に胡蝶と化
 したること莊子に
 見ゆ。

花に鳴く鶯水にす
 む蛙の聲をきけば
 いきとしいけるも
 のいづれか歌をよ
 まざりける。

五 古池や蛙とびこむ
 水の音。(芭蕉)
 六 芭蕉翁。

一四 百蟲譜

横井也 有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきもの、限なるべし。それ
 も啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ尙めでた
 けれ。さてこそ莊周が夢も、このものには託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこ
 そ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるは、よし。古
 池に飛んで翁の目をさましたれば、この物の事さらにも謗
 りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日
 ざかりに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば、初

やがて死ぬけしきは見えす蟬の聲。
(芭蕉)

車胤貧しくして常に油を得ず。夏月數十の螢を練囊に入れ、その明にて書を読みきといふ。

ほとぎすのこと蜀の望帝の魂魄化してほとぎすになりぬといふ傳説あり。

蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、この者ばかり初蟬といはるゝこそ大いなる手がらなれ。「やがて死ぬけしきは見えす」と、このものゝ上は、翁の一句に盡きたりといふべし。螢はたぐふべきものなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすたく。五月の闇は、たゞこの者の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代にせられたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならん。つくくばふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死にて、この者になりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魄の雲に叫ぶ

にも劣るべからず。

魂

蜘蛛は巧みに網を結んで潜つて物を害せんとす。ひとへに奸賊の心ありて、いとにくし。さはいへ、廢家の荒れたる軒に蟬の羽など懸け捨てたるは、聊かあはれ添ふる折もあらんか。蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたがために身をこがすにか。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は物ずきの謗となれり。同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌をもとめて、やまず。いつか槐安の都を遁れて、

淳于棼が夢に大槐安國に入り王に見えて南柯郡の守となり二十年を経て送り出さると見て、夢寤め、古槐下を尋ねしに蟻穴ありきといふ故事あり。

蠶螂斧を擧げて龍車に當るといふ故語あり。

駿^二 國駿東郡原町
駿^三 河國富士郡吉原

その身の安き事を得ん。さはれたよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。蝸牛は只水に在るべきもの、いかで草葉に遊ぶらん。家もちたれども、行く先々を負歩くは、水雲の安きにも似ず。蛇蚯蚓の足なくとも歩くべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蠶螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩にたとふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人には似たり。促織鈴蟲響蟲はその音の似たるを以て名によべり。松蟲

秋風にほころぶべし
らし藤ばかりついで
りさせふきりす鳴く
古今集
あまのかる藻にす
むむしのわれから
とねをこそ泣かめ
世をばらちみじ
古今集

三 みの蟲いとあはれ
なり鬼の生みけれ
ば親に似てこれぞ
おそろしき心ちぞ
あそぶしき心ちぞ
しききぬひききせ
て今秋風の吹かん
折にぞいひて逃げ
てよとにけるもし
すは八月の音聞きし
れば八月ばかりなり
はかなげに哀なり
枕草紙

のその木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも同じ名有りて、松を枯し人にうとまる。一つ在所に、二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。きりくすのつりさせとは、人のために夜寒を教へ、藻に住む蟲はわれからと、只身の上を歎くらんを、蓑蟲のちよよと呼ぶは、母をば慕はずして、など父をのみ戀ふらん。蚊は憎むべき限ながら、さすが、卯月の頃、端居めづらしき夕、始めてほのかに聞きたらん、又は、長月の頃、力なく残りたるは寂しきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊遣焚く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげ

竹林七賢のこと。
晋の阮籍・嵇康・山
濤・向秀・劉伶・王
戎・阮咸をいふ。

しきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけん。
御到作

(鶉衣)

一五 千客萬來

「千客萬來。」皆來ると、困るなり。
雪隠へ先を越されて、月をほめ。
源左衛門、鎧をきると、犬が吠え。
紹のはおり、螢が着ると、しまひなり。
藥禮の時は、こつちで匙かげん。
太平の世は兵法もはらこなし。
片假名に四角な文字は手を引かれ。

釣れますか、などと、文王側へ寄り。

一六 落花の雪

太平記

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれしのを、召捕はれて、
鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣、實にも
とて赦免せられたりけるが、また今度の白狀共に専ら隱謀
の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、また
六波羅へ召捕はれて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは
法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失
はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ
設けてぞ出でられける。

吉野朝時代の軍記
右中辨藤原俊基
後醍醐天皇の正中
元年

元徳二年

またや見ん交野の
みの、櫻狩花の雪
ちる春の曙。

(藤原俊成)

朝まだき嵐の山の
寒ければ紅葉の錦
きぬ人ぞなき。

(藤原公任)

落花の雪に踏みまよふ片野の春の櫻狩紅葉の錦を着てか
へる嵐の山の秋の暮一夜を明すほどだにも旅寝となれば
ものうきに、恩愛のちぎり浅からぬ我が故郷の妻子をば行
方も知らず思ひ置き年久しくも住みなれし九重の帝都を
ば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出でたまふ心のうちぞあは
れなる。

近江より朝立ちく
ればうれの野にた
づぞなくなる明け
ぬこの夜は。

(古今集)

白露も時雨もいた
くもる山は下葉の
こらす色づきにけ
り。

(紀貫之)

憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を打
出の濱。沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く身
をうき船のうきしづみ、駒もとゞろと踏鳴らす勢多の長橋
打渡り、行きかふ人にあふみちや、世をうねの野に鳴く鶴も
子を思ふかと哀なり。時雨もいたくもり山の木下露に袖

ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山
はありとても、泪に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間
にもおいそのもりの下草に駒を止めて顧みる。故郷を雲
や隔つらん。

人住まぬ不破の關
屋の板庇荒れにし
後は只秋の風。

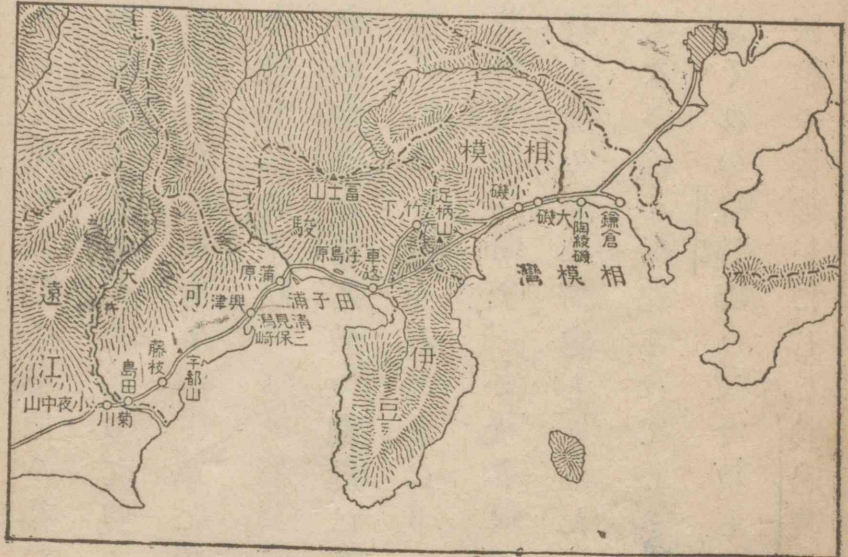
(藤原良經)

小夜千鳥聲こそ近
くなるみがた傾く
月にしほやみつら
ん。

(藤原季龍)

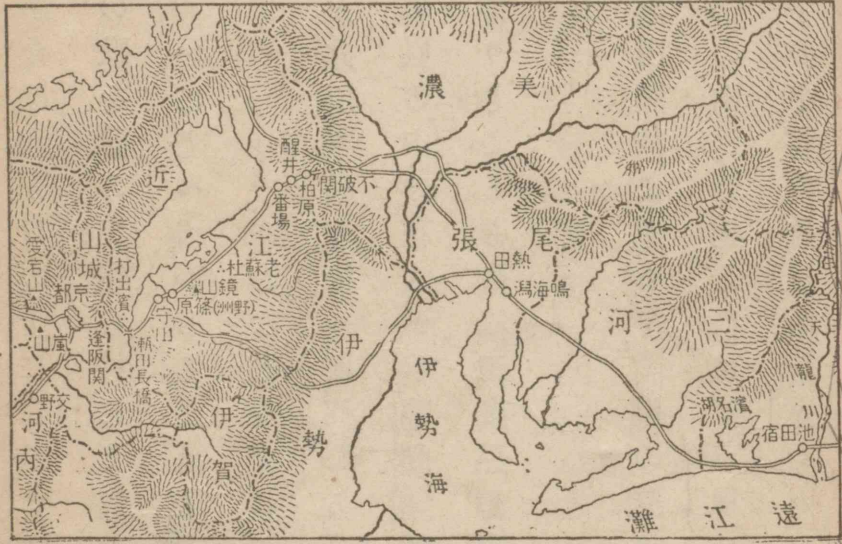
今やなるみがた。かたぶく月に道見えて、明けぬ暮れぬと
行く道の末は何處ととほたふみ、濱名の橋の夕汐に引く人
もなき捨小船、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれとゆ
ふぐれの晚鐘鳴れば、今はとて池田の宿に着き給ふ。
旅館の燈幽かにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍

*年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山。



川を打渡り、小夜の中山越え
行けば、白雲路を埋み來て、そ
ことも知らぬ夕暮に、家郷の
天を望みても、昔西行法師が
「命なりけり」と詠じつゝ、二度
越えしあとまでもうらやま
しくぞ思はれける。
際行く駒の足はやみ、日已に
亭午にのぼれば、餉進らする
程とて、輿を庭前に昇止む。
轅を叩きて警固の武士を近

*中納言藤原宗行



づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊
川と申すなり。」と答へければ、
承久の合戦の時院宣書きた
りし答に因りて、宗行卿關東
へ召下されしが、此の宿にて
誅せられしとき、
昔南陽縣菊水、汲下流、而延
齡。
今東海道菊川、宿西岸、而終
命。
と書きたりし遠き昔の筆の

跡今は我が身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへも、かゝるためしをきく川の

おなじながれに身をやしづめん。

(一)カド
山城葛野郡嵯峨なる離宮

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷓首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。

(二)三
歸り来る程はなけれど、朝露の園邊の眞葛うら枯れにけり。(藤原爲家)
(三)三
駿河なるうつの山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり。

島田・藤枝に懸りて、岡邊の眞葛裏枯れて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦楓ツタカエデいとしげりて、道もなし。昔、業平の中將の住む所を覓めんとて、東の方に下るとて、夢にも

人に逢はぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

祢原

(一)三
清見潟浦風さむき夜なは夢もゆるさぬ波の關守。(院大納言典侍)

(二)三
富士のれの煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり。(藤原家隆)

(三)三
元弘元年

清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守にいと涙を催され、むかふはいづこ、みほが崎、興津、蒲原、打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、汐干や浅き、船浮きて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車がへし。竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に鎌倉にこそ着き給ひけれ。

小磯佐
其地名

一七 熊野落 太平記

(一) 護良親王のこと。
當(二) 尊雲法親王と稱せらる。御年廿四。
(三) 奈良市奈良坂にあリ。
(四) 大和國相樂郡笠置山。

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されん爲に、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上囚れさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履むおそれ御身の上に薄りて、天地廣しと雖も、御身ををさめらるべき所なく、日月明かなりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は、孤村の辻にイみて人を咎むる里の犬に御心を惱され、何處とても、御心安かるべき所なかりければ、かくても暫時はと思召されける所に、一乘院の候人按察法眼好專、いかゞして聞出

(四) 奈良にありき。

* 佛經の名。六百卷あり。唐の玄奘三藏の譯せしもの。

したりけん、五百餘騎を率ゐて、未明に般若寺へぞ寄せたりける。折節、宮に付き奉りたる人、一人もなかりければ、一防防ぎて、落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく、兵、既に寺内にうち入りければ、紛れて御出あるべきかたもなし。さらば、よし、自殺せむと思召して、既におし膚脱がせ給ひたりけるが、事協はざらん期に臨みて腹を切らんことは、いと易かるべし。もしやと、隠れて見ばや、と思召しかへして、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は、いまだ蓋を開けず。一つの櫃は、御經を半ば過ぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋を開けたる櫃のうちに御身を縮めて伏させ給ひ、その上

に、御經を引きかづきて隱形の咒を御心の中に唱へてぞおはしける。もし捜し出されなば、やがて突立てんと思召して、氷のごとくなる刀を抜きて、御腹にさし當て、兵、こゝにこそ」といはんずる一言を待たせ給ひける、御心の中、推量るもなほ淺かるべし。さる程に、兵、佛殿に亂れ入りて、佛壇の下天井の上までも、殘る所なく捜しけるが、餘りに求めかねて、「これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開けて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開けて、御經を取出し、底を翻して見けれど、おはせず。蓋開きたる櫃は見るまでもなしとて、兵皆寺中を出て去りぬ。宮は不思議の御命をつながせ給ひ、夢に道行く心地して、尙櫃の中におはしけるが、もし復兵

立ちかへり、委しく捜す事もやあらんずらんと御思案ありて、やがて、前に兵の捜し見たりつる櫃に入り替らせ給ひてぞおはしける。案の如く、兵ども、また佛殿に立ちかへり、前に蓋の開きたるを見ざりつるが、覺束なしとて、御經を皆うち移して見けるが、からくとうち笑ひて、大般若の櫃の中をよく搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄井三藏こそおはしけれ。と戯れければ、兵みな一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、又は、十六善神の擁護にかゝれる命なり。と、信心御肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

帝釋天の眷族にして古來軍神として崇めらる。十六の護法の善神

御出ありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御伴の衆には、光林坊玄尊、赤松律師、則祐木寺相模、岡本三河坊、武藏坊、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉りて御伴の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君もとより龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて協はせ給はじと、御伴の人々かねて心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮、脚巾、草鞋を召して、少しも草臥たる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の

淡路の東岸にあり

共に紀伊國海草郡に在る勝地。和歌の浦。吹上の濱。玉津島明神。



御勤懈らせ給はざりければ、路次に行遭ひける道者も勤修を積める先達も、見咎むる事なかりけり。

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の楫をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山、渺々と薄紫や藤代の松にかかれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に登ける玉津島、光も今はさらでだに長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなる

唐の盧綸の詩に、
孤村の樹色殘雨
昏し、遠寺の鐘聲
夕陽を送る」とあ
り。
紀伊國日高郡切目
村。
熊野本宮と新宮と
をさす。

この所言廻し方穩
かならず。

に、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時
しもあれ、切目の王子に著き給ふ。
その夜は、叢祠の露に御袖をかた敷きて、夜もすがら祈り申
させ給ひけるは、傳へ承る、兩所權現はこれ伊弉諾伊弉册の
應作なり。わが君その苗裔として、今朝日、忽ちに浮雲のた
めに隠されて、冥闇たり。あにいたましからずや。玄鑿む
なしきに似たり。神、若し神たらば、君、何ぞ君たらざる。と、五
體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。
丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗にはか
られたり。
終夜の禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫

本宮と新宮と那智
とをいふ。

大和國吉野郡。

く御目睡ありける御夢に、鬢結ひたる童子一人來て、熊野三
山の間は、尙も人の心不和にして、大義成りがたし。これよ
り、十津河の方へ御渡り候ひて、時の到らんを御待ち候へか
し。兩所權現より案内者に附けまゐらせられて候へば、御
道指南仕るべく候ふ。と申すと御覽せられて、御夢は即ち覺
めにけり。これ權現の御告なりけりと、たのもしく思召さ
れければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、頓て、十津河を尋ねてぞ
分入らせ給ひける。

その道の程三十餘里が間には絶えて人里もなかりければ、
或は高峯の雲に枕を欹て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水
に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨な

くして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁、刀に削り、見おろせば、千丈の碧潭、藍に染めり。數日の間、かゝる嶮難を経させ給へば、御身もくたびれはて、流るゝ汗、水のごとし。御足は缺損じて、草鞋皆血に染れり。御伴の人々も、その身鐵石にあらざれば、皆飢疲れて、はかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し御手をひきて、路の程十三日に、十津河へぞ著かせ給ひける。

◎ 狐 塚

▲ 主人此の邊の者でござる。某山田を數多持つてござる。當年は事の外好う出來てござる。さりながら、此の頃は鹿猿貉が出て田を荒します。

太郎冠者を喚出し、山田の番に遣らうと存する。やい、太郎冠者あるか。▲ 太郎はア、御前に居ります。▲ 主、汝を喚出すこと別の事でない。當年は身共の山田が事の外好う出來た。夫に付き、頃は鹿猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へ行て、鳥獸も來らば逐うて番をせい。▲ 太、畏つてござる。私一人でござるか。▲ 主、いや、後程は次郎冠者も見舞に遣らう程に、先づ行け。▲ 太、心得ました。▲ 主、乍然、此の内は狐塚の狐が出て化すと云ふ程に、化されぬやうにして、番をせい。▲ 太、夫は可怖いこととござる。最早參ります。▲ 主、明日早々歸れ。▲ 太、はア。▲ 主、忍い。▲ 太、はア。道行。扱も、迷惑なことを云付けられた。夜晝使はるゝと云ふは氣の毒なことぢや。參る程にこれぢや。先づ是に居て、番を致さう。▲ 主、太郎冠者を山田へ番に遣はしてござる。定めて淋しうして居るでござらう。次郎冠者を見舞に遣はさうと存する。やい、次郎冠者あるか。▲ 次、これに居ります。▲ 主、汝は太儀ながら、山田へ行て、太郎冠者が伽をしてやれ。▲ 次、畏まつてござる。▲ 主、小筒もちと持つて行け。▲ 次、心得ました。是は扱迷惑なれども、參らずばなるまい。主命ぢや。

是非に及ばぬ。是非は暗うて、何處やら知れることで無い。呼ばはつて見よう。はい、太郎冠者やい。何處に居るぞ。▲太「さればこそ狐が出た。彼は次郎冠者が聲ぢや。好う似せた。汝化おのれさるゝことでは無いぞ。先づ眉毛を濡さう。▲次「はい。▲太「はい。此處に居るわ。▲次「何處に居るぞ。▲太「此處に居るわ。やア、次郎冠者か。▲次「中々。頼うだ人が吩咐けられて、伽に來たわ。▲太「好うこそありやつたれ。扱も扱も、好う化けた。其儘の次郎冠者。捕へて縛つてやらう。やい、次郎冠者。最前向の山から大きな鹿が出たを、身共が逐うたれば、此方の山へくわらゝと逃げたわ。▲次「それは出かした。▲太「どつこへやることでは無いぞ。▲次「是は何とするぞ。▲太「何とするとは、狐め化さるゝことでは無いぞ。▲次「己は次郎冠者。▲太「何の次郎冠者。汝縛つて此の柱に括つて置いて、狐殿、よい姿なりの。汝、今に皮を剥いでくれようぞ。』

▲主「太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣はしてござる。心許なうござる。見に參らうと存する。はい。太郎冠者やい。次郎冠者やい。はい。▲太「是は如何な事。復狐が出居つた。彼は頼うだ人の聲ぢや。此も捕へてやらう。はい。▲主「はい。何處に居るぞ。▲太「此處に居ます。▲主「やア、これに居るか。淋しからうと思つて、見舞に來た。次郎冠者を先へおこしたが。▲太「中々、彼處に居ます。是非は如何な事。此も好う化けた。其のまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。かつきめ。おのれ、騙さるゝことでは無いぞ。▲主「是は何とするぞ。身共ぢや。▲太「おのれも好う化けた。先づ縛つて此の大木に括り付けて置いて、致しやうがある。狐は松葉で燻べると嫌がると云ふ。燻べてやらう。さア、尾を出せ。鳴け。▲主「汝、太郎冠者め。主を此の様に、して、罰當りめ。▲太「何を狐殿云はるゝ。さらば、次郎冠者、狐も燻べてやらう。さア、鳴け。こんくと云へ。▲次「是は何とする。▲太「ありや。厭がるわ。汝、二疋ながら、鎌を取つて來て、皮を剥いてくれうぞ。待つて居れ。よう化さうと思つたなア。只今殺してくれうぞ。鎌を取つて來るぞ。▲主「さても、氣の毒な奴ぢや。やア、それに見ゆるは、次郎冠者か。▲次「左様でござる。こなたは頼うだ御方か。▲主「なかく。汝も縛り居つたか。▲次「いかにも縛られました。▲主「何と、鎌を取つて

へてやらう。はい。▲主「はい。何處に居るぞ。▲太「此處に居ます。▲主「やア、これに居るか。淋しからうと思つて、見舞に來た。次郎冠者を先へおこしたが。▲太「中々、彼處に居ます。是非は如何な事。此も好う化けた。其のまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。かつきめ。おのれ、騙さるゝことでは無いぞ。▲主「是は何とするぞ。身共ぢや。▲太「おのれも好う化けた。先づ縛つて此の大木に括り付けて置いて、致しやうがある。狐は松葉で燻べると嫌がると云ふ。燻べてやらう。さア、尾を出せ。鳴け。▲主「汝、太郎冠者め。主を此の様に、して、罰當りめ。▲太「何を狐殿云はるゝ。さらば、次郎冠者、狐も燻べてやらう。さア、鳴け。こんくと云へ。▲次「是は何とする。▲太「ありや。厭がるわ。汝、二疋ながら、鎌を取つて來て、皮を剥いてくれうぞ。待つて居れ。よう化さうと思つたなア。只今殺してくれうぞ。鎌を取つて來るぞ。▲主「さても、氣の毒な奴ぢや。やア、それに見ゆるは、次郎冠者か。▲次「左様でござる。こなたは頼うだ御方か。▲主「なかく。汝も縛り居つたか。▲次「いかにも縛られました。▲主「何と、鎌を取つて

來る、殺さうと云ひ居つたが、何と、其方が繩は解かれぬか。▲次「されば、どうやら、繩が解けさうにござる。解けませど〜」。さア解きました。どれどれ、こなたも解きませう。さても〜、憎い奴でござる。何としたものでござらう。▲主「いや〜、此の態では側へ寄るまい程に、元の様に居て、これへ來たらば、捕へて、彼奴をゆりに上げう。▲次「一段と好うござらう。▲主「さア、これへ寄つて、元の様に居よ。▲次「心得ました。』

▲太「狐めは二疋ながら居るか知らぬ。此の鎌で打殺してくれう。さア今打殺すぞ〜」。▲主「そりや、次郎冠者。▲次「心得ました。▲主「汝は憎い奴の。次郎冠者、足を持て。▲次「心得ました。▲主「さアゆりに上げ、ゆりにあげ。▲太「これは、何と狐共するぞ。▲主「狐とは、まだ汝めは。憎い奴の。縛り居つたがよいか。これが好いか。▲太「さては、頼うだ人。次郎冠者か。許させられ。眞平御許され〜」。▲二人「何處へうせる。やるまいぞ〜」。

(狂言全集)

鎌倉時代の軍記。

元暦元年二月七日
攝津國武庫郡、平軍の據りて、搦手としたる處、今の神戸市の西方。

一八 敦盛の最期

平家物語

さる程に、一(一)の谷の軍敗れしかば、武藏國の住人熊谷次郎直實、平家の公達の助船に乗らんとて、汀の方へや落ち行き給ふらん。あつばれ、よき大將軍に組まばや。」と思ひ、細道にかかつて汀の方へ歩まする所に、茲(二)に、練貫(三)に鶴縫うたる直垂に、萌黄(四)にほひの鎧着て、鉄形打つたる兜(五)の緒をしめ、黄金づくりの太刀を佩き、二十四挿いたる切斑(六)の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢葦毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乗つたりける者一騎、沖なる船を目がけ海へさつと打入り、五六反ばかりぞ泳がせける。

直家。

熊谷「あれはいかに、よき大將軍とこそ見まゐらせて候へ。正なうも敵に後を見せ給ふものかな。返させ給へく。」と扇を揚げて招きければ、招かれて取つて返し、汀にうち上らんとし給ふ處に、熊谷波打際にて押並べ、むずと組んで、どうと落ち、取つて押へて首をかゝんとて、兜をおし仰のけて見たりければ、薄假粧して鐵漿黒なり。我が子の小次郎が齡ほどして十六七ばかりなるが、容顔まことに美麗なり。「そもそも如何なる人にてわたらせたまひ候やらん。名のらせ給へ。助けまゐらせん。」と申しければ、「まづ、かういふ和殿はたそ。」物その數にては候はねども、武藏の國の住人熊谷の次郎直實。」と名のり申す。「さては、汝がためには、好い敵ぞ。

名のらずとも、首を取つて人に問へ、見知らうずるぞ。」と宣ひける。

熊谷「あつばれ、大將軍や。此の人一人討ち奉つたりとも、負くべき軍に勝つべきやう無し。又、助け奉つたりとも、勝つべき軍に負くることもよも有らじ。今朝、一の谷にて、我が子の小次郎が薄手負うたるをだにも、直實は心苦しく思ふに、此の殿討たれ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲しみ給はんずらめ。助けまゐらせん。」とて、後を顧みたりければ、土肥梶原五十騎ばかりで出て来る。熊谷涙をはらくと流して、「あれ御覽候へ。いかにもして助けまゐらせんとは存じ候へども、味方の軍兵雲霞の如くに満ちく、て、よも遁

次郎實平。
平三景時。

しまゐらせ候はじ。あはれ、同じうは直實が手にかへ奉つて、後の御供養をも仕り候はん。」と申しければ、「たゞ如何様にも疾う／＼首を取れ。」とぞのたまひける。

熊谷餘りにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず、目もくれ心も消えはて、前後不覺に覺えけれども、さても有るべき事ならねば、泣く／＼首をぞ搔いてける。「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しに只今かゝる憂目をば見るべき。情なうも討ち奉つたるものかな。」と、袖を顔に押當て、さめ／＼とぞ泣き居たる。

首を包まんとて、鎧直垂を解いて見ければ、錦の囊に入れら

義經。
平忠盛の子、清盛の弟。

れたりける笛をぞ腰にさゝれたる。「あな、いとほし。この曉城の内にて管絃し給ひつるは、此の人々にておはしけり。當時、味方に東國の勢何十萬騎か有るらめども、軍の陣に笛持つ人はよも有らじ。上臈はなほも優しかりけるものを。」とて、これを取つて大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば、修理大夫經盛の乙子、大夫敦盛とて、生年十七にぞ成られける。それよりしてこそ熊谷が發心の心は出できにけれ。

一九 扇の的

平家物語

さる程に、阿波讚岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども

元暦二年二月。

あそこの峯、この洞より、十四五騎・二十騎打連れ、馳せ
 来るほどに、判官程なく三百騎になり給ひぬ。「今日は日暮
 れぬ。勝負を決すべからず。」とて、源平互にひき退く所に、沖
 より尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七
 八段ばかりにもなりしかば、船を横さまになす。「あれは如
 何に。」と見るところに、船の中より、年の齡十八九ばかりなる
 女房の、柳の五つ衣に紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出した
 るを船のせがいに、扱みたて、陸へ向つてぞ招きける。

表白裏青。

檢非違使尉義經。

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに。」とのたまへば、「射
 よとにこそ候らめ。たゞし、大將軍の、矢面に進んで傾城を
 御覽ぜられんところを、手だれにねらうて射落せとの謀と

こそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるへうもや候
 らん。」と申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かある。」と問
 ひ給へば、「手だれども多く候なかに、下野國の住人、那須、太郎
 資高が子に與一宗高こそ小兵にては候へども、手はきいて
 候。」と申す。判官、證據があるか。」とさん候。かけ鳥などを争
 うて、三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官、さらば、
 與一呼べ。」とて召されけり。

與一、その比は、まだ二十許りの男なり。かちんに赤地の錦
 を以ておほくびはたそでいろへたる直垂に、萌黄威の鎧き
 て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑
 に鷹の羽割合せてはいたりけるぬための鎧をぞさし添へ

紺の襷き色。
 袖のさき袖口の方
 に更に半幅のもの
 をつき足したるを
 いふ。
 緒をとほす金具を
 銀にて作れる太刀
 鞘の角にて作れる

たる、滋籐の弓脇に挟み、甲をば脱いで高紐にかけ、判官の御前に畏まる。

判官、いかに與一。あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。と宣へば、與一、仕つツとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、ながき味方の御弓矢の疵にて候へし。一定仕らうずる仁に仰せつけらるべうもや候らん。と申しければ、判官大いに怒つて、今度、鎌倉を立つて西國に向はんずる者どもは、皆、義經が下知を背くべからず。それに、少しも子細を存ぜん人々は、これより疾うく鎌倉へかへらるべし。とぞ宣ひける。與一、重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけん。さ候はば、外れんをば存じ候はず。御説で候へば、仕つて

やどり木の上に鳩
二つ飛べる形をい
ふ。

こそ見候はめ。とて、御前をまかり立ち、黒き馬の太く遅しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取直し、手綱かいくつて、汀へ向ひてぞ歩ませける。御方の兵ども、與一が後を遙かに見送つて、此の若者、一定仕らうずるとおぼえ候。と申しければ、判官も頼しげにぞ見給ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海の中一段許り打入れたりけれども、猶扇のあはひは七段許りもあるらんとこそ見えたりけれ。

比は二月十八日、酉の刻許りのことなるに、折節、北風烈しう吹きければ、磯打つ浪も高かりけり。船はゆり上げ、ゆりすゑ、たゞよへば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には平

家船を一面に並べて見物す、陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。何れもく晴ならずといふことなし。與一目を塞いで、南無八幡大菩薩別しては、わが國の神明、日光の權現、宇都宮、那須の湯泉、大明神。願はくは、あの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切折り、自害して、人に再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと思召さば、この矢はづさせ給ふな。」と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

與一、鏑を取つて番ひ、よつ引いて、ひようと放つ。小兵といふでう、十二束三つ伏せ、弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴りして、過たず、扇の要ぎは一寸ばかり置いて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へあがりける、春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられるを、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏艫をたたいとよめきけり。

二〇 義時と泰時

増

鏡

さても、院の思し構ふること、しのぶとすれど、やうく漏れ船んやあきこえて、ひがしさまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて、伊賀判官光季といふものあり。かつと彼

鐵倉時代の歴史物語。
後鳥羽院。

承久三年五月二十
一日のこと。

を御勘じのよし仰せらるれば、御方に參る兵ども押寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。「まづ、いとめでたし。」とぞ院は思召しける。あづまにも、いみじうあわてさわぐ。「さるべくて、身のうすべき時にこそあなれ。」と思ふものから、「討手の攻め來りなん時に、はかなきさまにて屍をさらさじ。おほやけと聞ゆとも、みづからしたまふことならねば、かつは我が身の宿世をも見るばかり。」と思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。

泰時を前にするていふやう、「おのれを、このたび、都に參らするは思ふところ多し。本意の如く清き死にをすべし。人

にうしろ見えなんには、親の顔また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども、義時君の御爲にうしろめたき心やはある。さればよこさまの死にをせんことはあるべからず。心をたけくおもへ。おのれ打勝つものならば、再びこの足柄箱根は越ゆべし。など、泣く／＼いひきかす。「誠にしかなり。また親の顔拜まん事もいと危し。」と思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに今やかぎり、あはれに心細げなり。

かくて、打出でぬるまたの日、思ひがけぬ程に、泰時唯一人鞭を揚げて馳せきたれり。父、胸打騒ぎて、「いかに。」と問ふに、軍のあるべきやう、大方の掟などは、仰のごとくその心を得侍

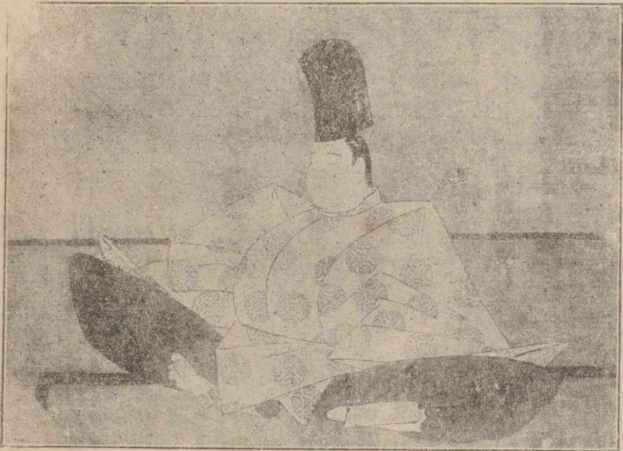
*承久三年五月二十
二日。

りぬ。もし、道のほとりにも、圖らざるに、忝く鳳輦を先だてて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんに参りあらば、その時の進退いかゞ侍るべからん。この一事を尋ね申さんとて、一人馳歸り侍りき。」といふ。

義時とばかり打案じて、「かしこくも問へるをのこかな。そのことなり。まさに君の御輿にむかひて弓を引くことは、いかゞあらん。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦をきりてひとへにかしこまりを申して、身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから、軍兵をたまはせば、命を捨て、千人が一人になるまでも戦ふべし。」と言ひもはてぬに、
急ぎ立ちにけり。

二 新島守

増 鏡



後鳥羽天皇

六つにて位に即き給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じ事なりしかば、すべて三十六年が程、この國のあるじとして萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を從へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡すよりもまされる

後鳥羽天皇。

土御門天皇。
順徳天皇。

津の國のこやとも
人あふべきにひ
まこそなけれ葦の
八重葦。(和泉式
部)

御有様にて、遠きをあはれみ近きを撫でたまふ御惠、雨の脚
よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政をきこしめ
すにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の
山の峯の松もやうく枝をつらねて、千代に八千代を重ね、
霞の洞の御住ひ、幾春を経ても、空ゆく月日の限知らず、のど
けくおはしましぬへかりける世を、ありくして、よしなき一
ふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、おのがちりくにさ
すらへ、磯の苦屋に軒を並べて、おのづからこととふものと
ては浦に釣する海士小舟、鹽やく烟のなびく方をもわが故
郷のしるべかとはかりながめすごさせたまふ御すまひど
もは、それまでと月日を限りたらんだに、明日知らぬ世のう

しろめたさに、いと心細かるべし。まして、いつをはてとか
廻りあふべきかぎりだになく、雲の浪、煙の浪の幾重とも知
らぬ境に世をつくし給ふべき御有様ども、くちをしといふ
もおろかなり。

このおはします處は人ばなれ、里遠き島の中なり。海づら
よりは少し引入りて、山かけにかたそへて、大きやかなる巖
の聳てるを便りにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばか
り、ことそぎたり。誠に柴のいぼりのたゞしはしと、かりそ
めに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、故づ
きて、しなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも、夢のやう
になん。はるくと見やらるゝ海の眺望、二千里の外も殘

(一) づくにもすまれ
ずば只すまであら
ん柴の庵のしばし
なる世に。(西行)
(二) 本院の造り給ひし
殿、攝津國三島郡
島本村大字廣瀬に
ありき。
(三) 白樂天の詩に「三
五夜中の新月の
色、二千里外の故
人の心」。

なき心ちする、今さらめきたり。潮風のいとこちたく吹き
來るをきこしめして、

われこそは新島守よ、隱岐の海の

あらし浪風、こゝろして吹け。

おなじ世に、またすみのえの月や見ん、

けふこそよそにおきの島守。

三 唐 錦

大和國故郷なりければ

下河邊長流

つひにわがきてもかへらぬ唐錦

たつたや何の故郷の山。

*國學者、難波に住む、貞享三年歿す。

春月

釋 契 沖

夕雲雀芝生におちて聲やめば、

山よりのぼる春の夜の月。

書

荷 田 春 滿

ふみわけよ、倭にはあらぬ唐鳥の

あとを見るのみ人の道かは。

羈 中時雨

賀 茂 眞 淵

都いでて露をいかにと思ひしに、

しぐれふるなり宮城野のはら。

古戰場

加 藤 美 樹

ものゝふの草むす屍年ふりて、

國學者、難波に住む、長流と友たり、元祿十四年歿す。贈正四位。

山城伏見の稻荷神社の神主、國學者、元文元年歿す、贈正四位、國學四大人の一人。

春滿門下、江戸に住む、田安宗武に住ふ、國學者、明和六年歿す、贈正四位、國學四大人の一人。

陸前仙臺市の近傍に在り。
眞淵門下、幕府の士、安永六年歿す。

信濃東筑摩郡の南端に在る古戰場。
京師の人、三歳書をなし、七歳詩を賦す、富士谷風の學風を起す。安永八年歿す。

田安宗武の子、白河城主松平定邦の嗣となる。天明七年幕府の老中となる。寛政九年致仕して樂翁と稱す。世に白河樂翁といふ。同十二年歿す。
眞淵門下、伊勢松坂に住む、國學者、享和元年歿す。贈正四位、國學四人の一人。
京都岡崎村に住む、歌を以て名あり、武伎音樂を好む。享和元年歿す。

眞淵門下、江戸の人、歌文及び筆札に名あり、文化五年歿す。
京都岡崎村に住む、徳大寺家に仕ふ、歌文に名あり、桂園と號す、蘆庵と交り、又名を齊しうす、舊派の古學派に對抗して新派桂園派を樹立す。從五位下、肥後守、天保十四年歿す。

秋風寒し桔梗が原。

寄果述懷

富士谷成章

あまたゝび花さく春はすごしきぬ、

實のなりいでん時はいつぞも。

夕顔の宿

松平定信

心あてに見し夕顔の花ちりて、

たづねぞわぶる、たそがれの宿。

己が像かきたる上に

本居宣長

しきしまの大和心を人とはば、

あさひににほふ山櫻ばな。

萩盛

小澤蘆庵

風たつな、雨もなふりそ、山姫の

はぎの錦をさらす今日なり。

霞中春雨

加藤千蔭

隅田川みのきてくだす筏師に

かすむあしたの雨をこそしれ。

曙雉子

村田春海

明けぬとて鳴くやきやすの聲のうち

ほのゝしらむ春の山畑。

木枯

香川景樹

おぼつかな、木の間に見ゆる三日月も

散るばかりなる木枯の風。

景樹門下、文政四年歿す。

京都東山に在り。

春海門下、江戸の人、醫を業とす、歌文に名あり、文政七年歿す。

正三位、左近衛中將、嘉永七年歿す。

初真淵門下荒木田久老に學び、後本居大平に學ぶ、伊勢の神主、正四位上に叙せらる、安政三年歿す。

オ居宣長の養子大平の門下、紀州藩に仕ふ、安政五年歿す。

遠江掛川在の人、六歳にして歌を詠む、神童の稱あり、真淵門下栗田土満に學ぶ、後名益揚る、安政六年歿す。

肥後の國學者、熊本藩に仕ふ、文久四年歿す。

京都に住じ、平田篤胤門下、學者、明治四年歿す。

新樹

木下幸文

夏くれば、青葉がくれに流れつゝ、

涼しさまさる清水の瀧。

初秋

清水濱臣

まどの桐、かきねの柳、一葉散り、

二葉亂れて、秋風ぞふく。

白鷺

千種有功

かつは行き、かつはイむ白鷺の、

しらず、いかなるもの思ふらん。

霰

足代弘訓

露の玉こぼれし夏は夢なれや、

蓮の枯葉に霰うつなり。

山路

加納諸平

みづちすむ淵を千尋のしたに見て、

太刀の緒かため行く山路かな。

古戦場

石川依平

ものゝふの命を露とあらそひし

荒野の末に秋風ぞ吹く。

冬山里

中島廣足

さえくし嵐は雪になりにけり、

松の葉白き夕ぐれの山。

嵐

大國隆正

猿さへ吹きおとされて山里の

庭になく夜の風の烈しさ。

(一) 鎌倉時代の人源親
行の著といふ。

(二) 四條天皇の御代。

二三 東路の旅

東 關 紀 行

仁治三年の秋八月十日あまりのころ、都を出て、吾妻へ赴く事あり。まだ知らぬ道のそら、山重なり江重なりて、はるばる遠き旅なれども、雲を凌ぎ霧を分けつゝ、しばしは前途の極りなきに進む。終に十餘りの日數を経て、鎌倉に下り着きし間、或は山館野亭の夜のとまり、或は海邊水流のかすかなる砌に至る毎に、目に立つ處々心とまる節々を書きおきて、忘れずしのぶ人もあらば、おのづから後の形見にもな

れとてなり。

(一) 逢坂の關の清水に
影見えて今や引く
らむ、望月の駒。

(二) (和貫之)

(三) 遊子猶殘月ニ行
キ、函谷鷓鳴ケ。
(賈島)

(四) 世の中はとててもか
くても過してむ宮
も藁屋もはてしな
ければ。(蟬丸)

東山の邊なる住家を出でて、逢坂の關打過ぐる程に、駒引渡る望月の頃もやうく近き空なれば、秋霧立渡りて、深き夜の影ほのかなり。ゆふつけ鳥かすかに音づれて、遊子なほ殘月に行きけん函谷の有様、思ひ出でらる。昔、蟬丸といひける世捨人、この關の邊に藁屋の床を結びて、常は琵琶をひきて心を澄し、大和歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきをわびつゝぞ過しける。

いにしへのわらやの床のあたりまで

こゝろをとむる逢坂のせき。

關山をすぎぬれば、打出濱・粟津原など聞けども、未だ夜のう

三三三
大和國高市郡高市村

ちなれば、さだかにも見えわかず。昔、天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の郡に都遷ありて、大津宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかしとおぼえて、あはれなり。

さゝ波や大津の宮のあれしより

名のみのこれる志賀の故郷。

曙の空になりて、勢多の長橋打渡すほどに、湖遙かにあらはれて、かの満誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝよめりけん歌思ひ出でられて、漕ぎゆく舟のあとの白波、誠にはかなく、心細し。

世の中をこぎゆく舟によそへつゝ

右大辨笠麻呂、養老五年出家。
四 中を何にたとへん、あさばらけこぎゆく舟のあとの白浪。

ながめし跡をまたぞながむる。

篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見えわたる。向の汀、緑深き松のむらだち、波の色も一つなり。南山の影を涵さねども、青くして洸瀟たり。洲崎處々に入りちがひて、葦かつみなど生ひわたれる中に、鴛鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔、都を立つ旅人この宿にこそ泊りけるが、今は打過ぐる類のみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くにこそ、變りゆく世の習、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりと覺ゆれ。

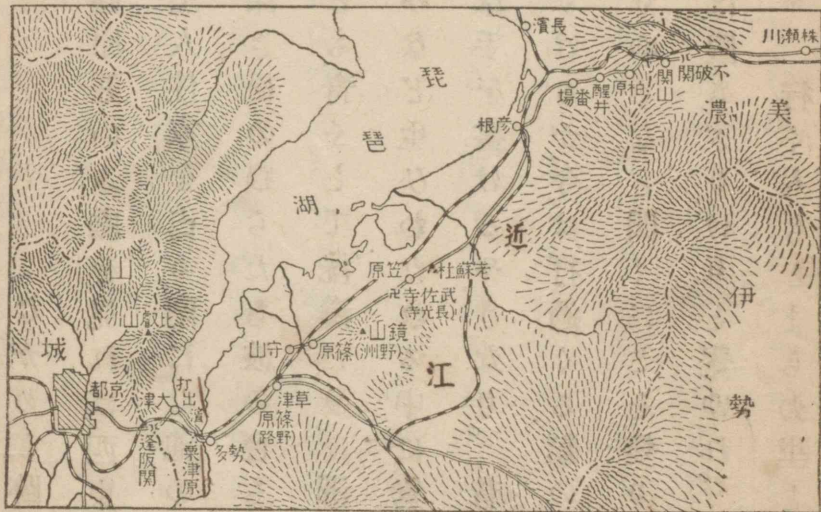
行く人もとまらぬ里となりしより

白樂天の詩に
影南山ヲ浸シテ
青クシテ洸瀟タ
リ。

世の中は何か常なるあすか川昨日の淵は今日の瀬なる。(古今集)

一名長光寺。

白樂天の詩に
「遺愛寺ノ鐘ハ枕
ヲ欲テ、聽ク」。



荒れのみまさる野路の
篠原。

行きくれぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風、夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心ちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺もかくやありけん、とあはれなり。行末

遠き旅の空思ひつゞけられて、いといたう物悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だに

かたしきわびぬ、とこのあき風。

この宿を出でて、笠原の野原打通るほどに、老蘇杜といふ杉村あり。下草ふかき朝露の霜にかはらん行末も、はかなく移る月日なれば、遠からずおぼゆ。

かはらじな、わがもとゆひにおく霜も、

名にしおいそのもりの下草。

音に聞きし醒が井を見れば、陰暗き木の岩根より流れ出づる清水、あまり涼しきまで澄渡りて、實に身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざるほどなれば、往還の旅人多く立ちよ

りて涼みあへり。かの西行が道のへに清水流るゝ柳かけ、
しばしとてこそ立ちどまりつれ。」と詠めるも、かやうの處に
や。

道のへの木陰の清水むすぶとて、
しばしすゝまぬ旅人ぞなき。

柏原といふ處をたちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川
霧の底におとづれ、嵐松の梢にしぐれわたりて、日影も見え
ぬ木の下道、あはれに心ぼそし。越えはてぬれば、不破の關
屋なり。萱屋の板びさし年經にけりと見ゆるにも、後京極
攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風」とよませたまへる歌思
ひいでられて、この上は風情もめぐらしがたければ、賤しき

藤原良經。
人すまわ不破の關
屋の板びさし荒れ
にし後はたゞ秋の
風。

水の面に照る月浪
をかぞふればこよ
ひぞ秋の最中なり
ける。(拾遺集)

言の葉を遣さんもなか／＼におぼえて、此處をば空しく打
過ぎぬ。

株瀬川といふ處にとまりて、夜ふくる程に、河端に立出でて
見れば、秋の最中の晴天清き河瀬にうつろひて、照る月なみ
もかず見ゆるばかり澄渡れり。二千里の外の故人の心、遠
く思ひやられて、旅の思いとゞおさへ難く覺ゆれば、月の影
に筆を染めつゝ、花浴を出でて三日、株瀬川に宿して一宵。

しば／＼幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつ／＼遠情
を前途一千里の雲に送る。など、ある家の障子に書きつくる
ついでに

知らざりき、秋のなかばの今宵しも、

かゝる旅寝の月を見んとは。

國學者、歌人、明治四年歿す。

二四 古戰場

井上文雄

戰場に戎衣かいつくろひ秋の霜に露の命きえを争ふ武士
 のならひばかりかなしきは、あらざりけり。あな、あはれ。
 君に事へてまめなる志を致さん人、必ず孝の人なり。あな
 あはれ。亂世のあさましき、忠臣孝子、大かた幸なく、赤き
 くろさながら駒の蹄にかけられ、白き骨すかれて道の草を
 肥せり。あな、あはれ。空しくちりひちとともにその名埋
 れけん人、いくそばくぞや。あな、あはれ。すき残したる片
 岡は、草刈るうなゐらも靈ありなど憚りて、木茂き藪踏み分

けたる跡だになし。折れ傾きたる石の卒塔婆、なからは土
 なからは苔に埋れて、彫りつけたりけん文字もその名とと
 もに消えはてにたり。あな、あはれ。香花とる人しなけれ
 ば、うかれし魂、今も猶涼しき國へ行きやらで、このわたりに
 やさまよふらん。あな、あはれ。雨そば降る宵、月暗き曉、青
 き火もえ、さけぶ聲聞ゆなど、おうな翁は語るぞかし。思ふ
 に、かゝるわたりには、けしからぬ物の、ところ得て、さるあや
 しのわざ見せて、人おどさんとするにこそ。忠臣孝子、君の
 ため親のために捨てけん身にさるさかなき執を残して、め
 めしう人に見ゆべしやは。あな、あはれ。さる事いひさわ
 がるゝも、亦幸なきが上の幸なきになん。あな、あはれと、涙

さしぐまれて、野中の清水一ひさごをだに手向けばやと、塚のほとり近うたち寄れば、蟻とかやいふ虫の羽おひたるがはと群りかゝりたる耳のほとり、つき驚かす遠寺の鐘いと高う聞えて、あな、あはれ、あな、あはれ。

二五 古語

桃李言ハザレドモ、下自ラ蹊ナナス。(史記)

道邇シト雖モ、行カザレバ至ラズ。事小ナリト雖モ、爲サザレバ成ラズ。(荀子)

恆産ナキ者ハ恆心ナシ。(孟子)

心ハ小ナランコトヲ欲シ、志ハ大ナランコトヲ欲ス、智ハ圓

ナランコトヲ欲シ、行ハ方ナランコトヲ欲ス。(文中子)

之ヲ知ルモノハ之ヲ好ムモノニ如カズ、之ヲ好ムモノハ之ヲ樂シムモノニ如カズ。(論語)

之ヲ知レルヲ知レリトシ、知ラザルヲ知ラズトス。是知レルナリ。(論語)

疏食ヲ飯ヒ、水ヲ飲ミ、肱ヲ曲ゲテ之ヲ枕トス。樂亦其ノ中ニアリ。不義ニシテ富ミ、且、貴キハ、我ニ於テ浮ヘル雲ノ如シ。(論語)

二六 世界の四聖

高山林次郎

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人

*櫻牛と號す、文學博士、文藝批評家。

にあらずんば、誰か是を能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテス、基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。其の本名を悉達多と云ふ。父は淨飯王、母は摩耶夫人なり。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、十九の歳、其の妻子を捨て、王城を逃れ、山林に隠れて、道を修むること六年、終に人生の奧義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。佛教は即ち釋迦一代の教訓に本づけるものなり。蓋し、釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。其の流派を樹て、相争ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ、未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦是の間に生れ、其の廣大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

*ヒマラヤ山の南麓、ガンヂス河上流一帯の地。

孔子名は丘、子は其の尊稱なり。今を去ること二千一百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令

景公。

聞あり。學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢てられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外其の風采を想望す。時に、齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子、時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方に遊説を試みぬ。當時の支那は謂はゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其の親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽敗、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を

以下論語中の語句

出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に翻さんとす。その志や高且大なりと稱ふべし。かくの如くにして、四方に漂浪すること十四年、時非にして道容れられず、世復、耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、吾が道遂に窮せり。世遂に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るもの無からんや。」孔子答へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず。下學して、上達す。我を知るものは、それ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と。幾ばくもなくして、歿しぬ。年七十三。

ソイフロニスコス

西曆紀元前第五世紀の後半に於て一時希臘に勢力ありし學派。始祖をアロータゴラスといふ。

ソクラテスは希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なりき。其の生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止まり、道德は空文の上のみ貴ばれたり。其の狀釋迦當時の印度の如く、人生社會の實際に關しては殆ど裨益するところなかりき。ソ氏は慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、其の獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず。侃諤の正義、其の稀代の雄辯と相

伴ひて、一世を風靡せり。しかるに、喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソ氏に快からざる者相謀りて、國法に背ける者として氏を讒訴せり。其の訴狀に曰く、ソ氏は國教を信ぜずして、異教を勸め、以て人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべし。と。ソ氏の是の讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソ氏を以て傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソ氏泰然として驚かず、曰く、命のみ。と。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて、生死・靈魂・未來の事を説き、人の脱獄を勸むる者に對しては、輒ち答へて曰く、予は唯正義

醫術の神。

に導かれんのみ。死亦何する者ぞ。人生の至福は靈魂の上
に在るを知らずや。」と。終に従容として毒を仰いで歿す。
將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソ氏曰く、「爾、一鷄を
以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。蓋し、氏の曾て病み
し時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖
人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

エルサレム市の西
南五哩半にあり。

基督は本名を耶蘇と云ふ。基督とは膏灌がれたる者と云
ふ義にて、教徒の奉りたる尊號なり。猶太のベツレヘムに
生る。今日の考證によれば、西曆紀元第一年は其の生後四
年に當れりといふ。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にし
て、母はマリアと云へり。長じて三十歳になりし頃、預言者

西曆紀元前三十年
代の人。後に基督
の弟子となる。

ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年
の間、猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、其の福音
を傳へたり。抑、當時は、羅馬帝國の榮華其の極に達し、禍亂
の萌芽其の中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日無く、殊
に基督の故國たる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人
の侮慢を被れり。民衆は徒らに淫祠を崇拜して益、放縱の
俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。是
に於て、一世の人心は缺焉として、偉人の出現して此の暗黒
の社會を照破せんことを渴望せり。基督此の間に生れ、自
ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然として其の偉大
なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧

侶學者官吏等これを喜ばず。猥りに新法異説を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め是の事あらんを慮り、泰然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ。彼等を許せ。彼等は其の爲すべき所を知らざればなり。」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて、曰く、「^{*}エルサレムの女子よ。吾が爲に哭く勿れ。唯己と己の子との爲に哭け。」と。かくの如くにして、基督が三十三年の短き一生は十字架上の露と消去りぬ。基督の死せる後、其の弟子等は劇烈なる迫害に抵抗して、其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是なり。以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉

^{*}パレスタインの都府。地中海岸より東方約三十五哩。

なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。四聖の内釋迦を除いては、何れも轆軻不遇の中に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは何れも讒人の手に罹りて斃れたり。慘憺たりと謂ふべし。然れども、此等の人々の志せる所は天下後世に在り。現世の禍福と一身の安危とは毫も其の顧慮する所にあらず。故に、其の死に就くや、晏如として、恰も歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却て「吾が道行はれずんば、われ何を以てか後世に見えんや。」と嗟嘆せり。釋迦は衆生のために其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅

迫に遇うて、揚言して曰く、「正義を信ずるものにとりて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日、國民の迷を覺さざるべからず。」と。基督は己を罪に陥るものゝために神に祈りたり。嗚呼、何ぞ其の慈悲の廣大にして無邊なるや。

四聖は其の生れたる處と時とを異にす。故に、其の教理にも亦多少の差異無きを得ず。今、其の要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して涅槃に達するを旨とす。それ、人生は苦に始まりて、苦に終る。生、老、病、死、孰れか苦にあらざるべき。故に、吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。

而して、苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念に執着するにあり。故に、吾人は「我」の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。是人生究竟の樂地にして、涅槃即ち是なりといふ。

格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下、之を大學の八條目といふ。
古文孝經の序にあり。

孔子の教は身(二)を修め、家(一)を齊へ、國を治め、天下を平かにするにあり。而して、身(三)を修むる基は孝にあり。故に、孝(三)は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆是に本づく。人は生れながらにして、美德を天に稟くけれども、後天の氣質によりて是を完うする能はざるもの多し。教育の要、こゝに於てかあり。既に教育を受けて、身既に修まらば家自ら齊ふべく、家齊はば國自ら治るべく、國治らば

天下自ら太平なるを得べし。故に、孔子の教は一身の修養に始まりて治國平天下に終るものと見るを得べし。ソクラテスの教は所謂知徳合一説なり。謂へらく、眞成の知識は即ち道德なり。故に、行ふと知るとはもと一體のみ。知つて行はざると行うて知らざるとは、共に知識道德の眞成なるものにあらず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の満足なり。而して、靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に、吾人の正義を行ふや、現世の利害は、決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴の爲に存せず、然れども、富貴は道德の中に在り。と。

猶太の祝福の山にて説ける教訓なり。
 (三)に列擧せる語句は新約全書馬太傳第五章中に見えたり。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。曰く、心の貧しきものは福なるかな。天國は其の人の有なればなり。悲しむものは福なるかな。其の人は慰めらるべければなり。飢渴く如く義を慕ふものは福なるかな。其の人は飽くことを得べければなり。恤あるものは福なるかな。其の人は恤を得べければなり。心の清きものは福なるかな。其の人は神を見ることを得べければなり。惡に敵することなかれ。人汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉らしてこれに向けよ。汝の隣人を慈みて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義を其の前に行ふなかれ。右

(三)同上第六章中に見えたり。

同上第七章中に見
えたり。

の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。偽善者の行に倣ふなかれ。隠れたるを鑿み給ふ神はあらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝ら求めよ。然らば、與へられん。尋ねよ。然らば、遇はん。叩け。然らば、啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門は其の路大きく、是に入るものは多し。嗚呼、いかに生命に至る門は窄く、其の路は細く、是を得るもの、少きぞや。凡そ是の訓を聽いて行ふ者は磐の上に家を建てたる智者の如く、聽けども行はざるは沙上に屋を架せる愚人の如し。と。基督教の精髓は、後世の人

如何なる色彩を加ふとも、實に是の山上の垂訓に基す。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年。而して、この教の今猶凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、此の教に憑りて、其の道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは、實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大なる、何を以て是に比せんや。(樗牛全集)

才四只奉西便
檣垣輝乃